大正六年九月十四日　第三種郵便物認可
大正十三年四月一日改訂　昭和二年一月一日改訂
（第七輯第四號）

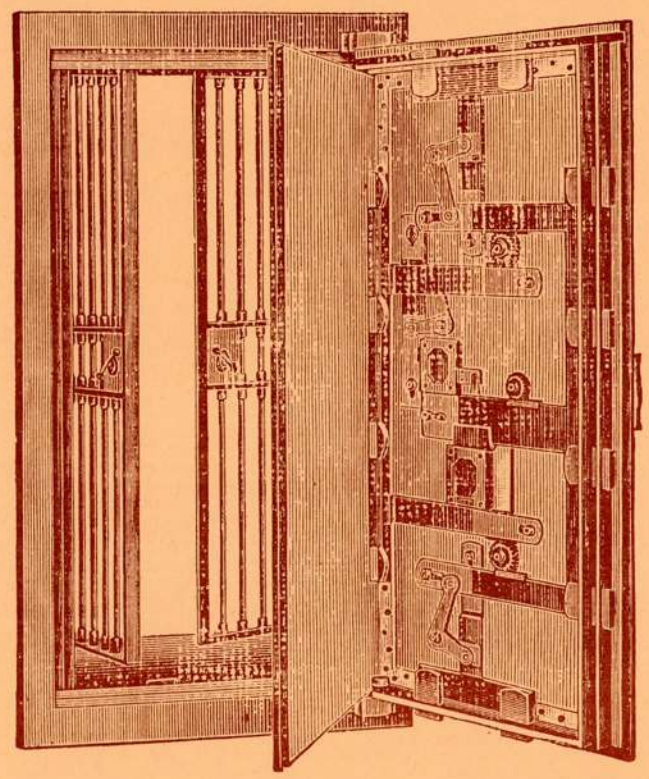


第七輯第四号

日本建築協會

大正十三年四月一日

耐震耐火 理想鐵扉の出現



金庫扉 金庫 製造界の權威

大谷金庫店

店主 大谷榮之介

顧問工學博士 細木松之介

獨逸人技師 ア・シューハルト

營業所 東京市京橋區岡崎町二丁目
京都市松原通東洞院東入
大阪市東區淀屋橋筋（道修町）
神戸市楠町六交叉點西

工場 東京第一工場 東京市京橋區佃島壹丁目
仝 第二工場 仝 深川區東元町
京都分工場 京都市松原通り大宮西入

通俗建築大講演會

■日　時　四月十二日(土曜日)午後正六時三十分より

■會　場　大阪市中央公會堂(北區中ノ島)

■講演順序

司會者	春季大會委員長	工學士	宗　兵藏君
開會の辭	日本建築協會理事長	工學士	池田　實君
趣味の建築	神戸高等工業學校教授	工學士	古宇田　實君
日本に於ける住宅の變遷と其將來	京都帝國大學教授	工學博士	武田五一君
建築家の社會的地位	日本建築協會副會頭	工學博士	片岡　安君
歐米旅行談	大阪府技師	工學士	中西甚作君
婦人に必要な住宅の智識	葛野建築事務所長	工學士	葛野壯一郎君
閉會の辭	春季大會委員長	工學士	宗　兵藏君

餘興　活動寫眞數種

以上講演者に多少の變更あるやも計られません聽講入場券は別に御送付致します尚便宜會場入口にても御渡し致します

■晩　餐　會

◉同日講演前(午後正五時開宴仝六時終了)大阪ホテルに於て

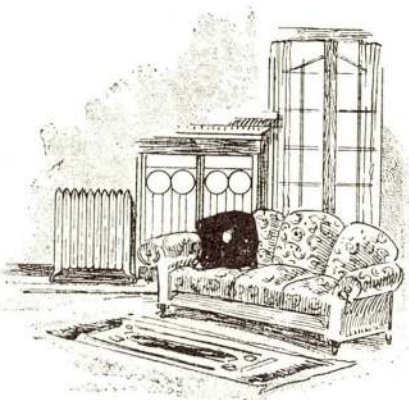
◉會　費　一人　金參　圓(當日御持參の事)

現出器房暖的想理

THE AUTOMATIC
Gas Steam Radiator

MANUFACTURED BY
Automatic Gas Steam Radiator Co.
U. S. A.

經費節約　取付簡單
衛生第一　體裁優美

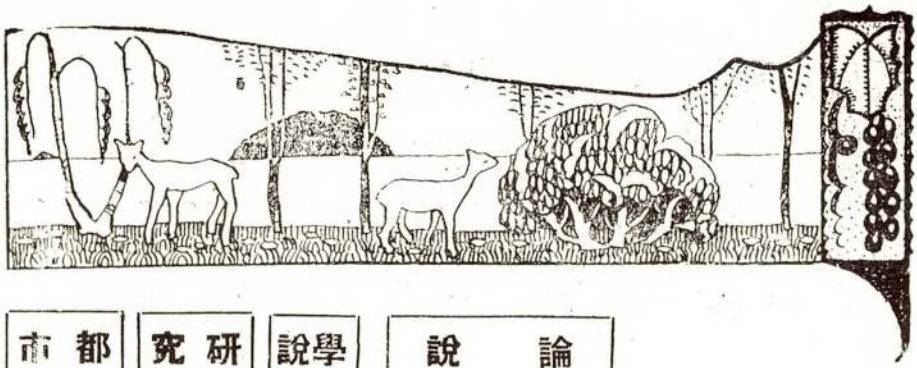


詳細最寄支店ニ御問合被下度候

日本總代理店
內田商事株式會社
神戸　東京　大阪







建築と社會　第七輯第四號目次

口繪　新築成れる日本基督派大阪北教會々堂

◆卷頭辭……春宵……

論說

◆大震災以來の我國民の態度に就て　日本建築協會副會頭　工學博士　片岡安　二

◆都市計畫と建築家……工學士　加藤善吉　八

學說

◆「コンクリート」より「鐵筋コンクリート」まで(二)……中村鎭　一七

研究

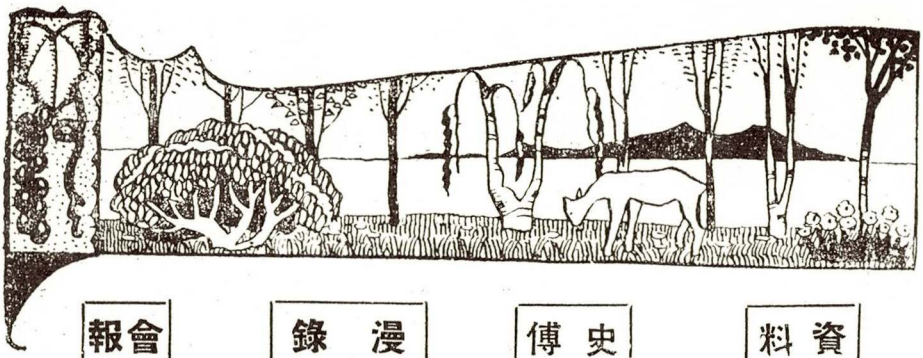
◆地震と耐震建築……無漏樹林　二七

◆建築藝術に於ける歷史の問題(三)……山崎萬壽夫　三五

都市

◆理想都市への過程……稻津圭三　四〇

◆震災と都市問題雜記……楠原祖一郎　四六



資料

◆關東方面震火災被害視察日誌・(四)・小川安一郎 三二
◆畫界に於ける新傾向・・・・・・・・・齋藤 與里・三六

史傳

◆ジョン、ナッシュを憶ふ・・・・・・曼荼羅社同人・池田谷久吉 六四

漫錄

◆象徵の墳墓・・・・・・・・・・・・・・・廣岡峰太郎・六九
——建築叙情篇(三)——
◆Mの言草・・・・・・・・・・・・・・・・偏心圓・七四
◆山陰温泉めぐり・・・・・・・・・・工學士・本多 二郎・七八
◆建築の質の問題・・・・・・・・・・・櫻木 浩・八三

會報

◆日本建築協會三月中記事・・・・・・・・・・・・・・・・・

GOOD

和洋家具の製作
室内裝飾の設工
其他一般木材加工

合資會社

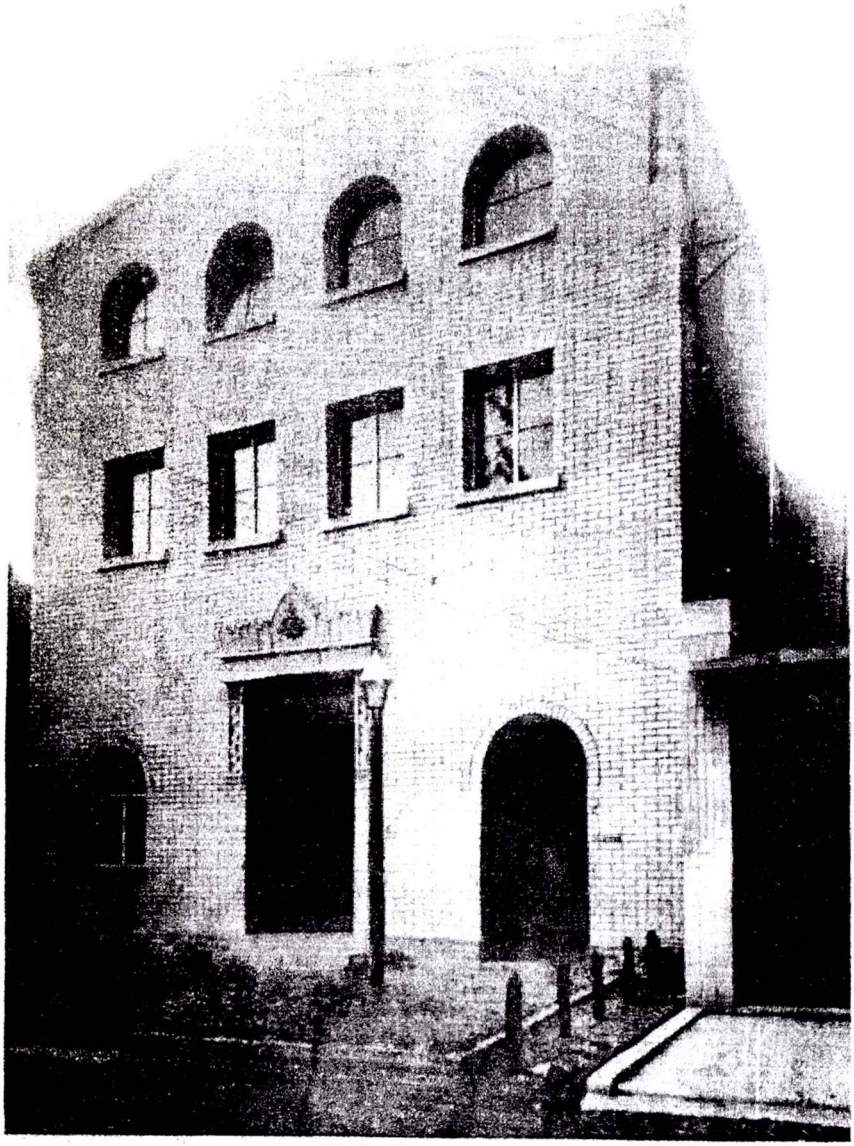
內外木工所

營業部
陳列所　電話國本局一七三六番
本店及工場　大阪市西區市岡町六七四
電話國西三〇八〇番

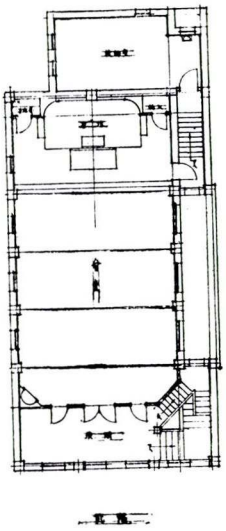
大阪市東區龍尾町四丁目心齋橋筋

FURNITURE

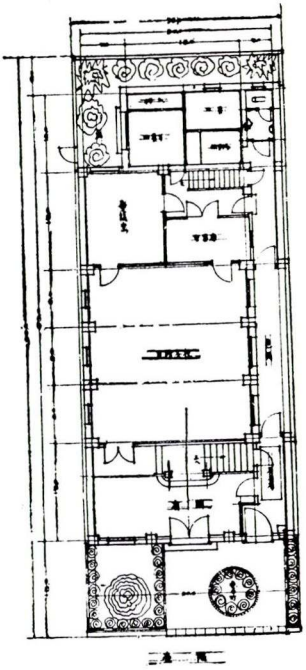
新築成れる日本基督派北教會々堂



——大阪市北區常安町——



第二階



第一階



公堂內部—禮拜堂

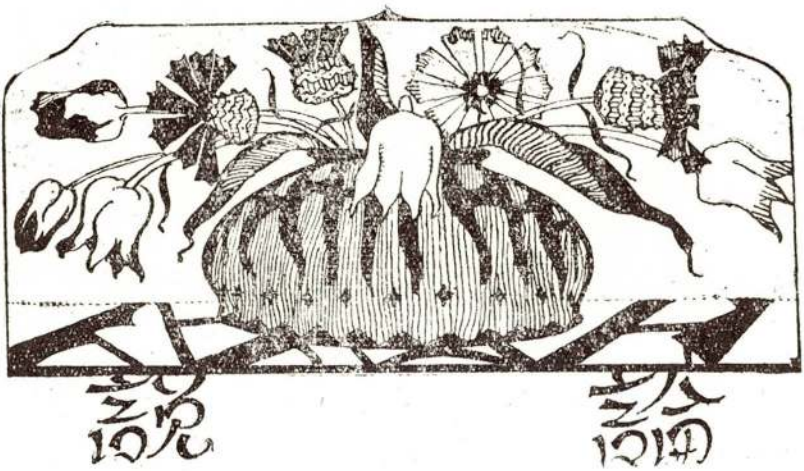


春宵

庭は夜と霧とで一杯です
地面は面紗でおほはれてゐます
小路の上に這つてゐる薄明りは
朧ろげに真珠のやうです

――――――

人絶えた街路がきら〳〵と金のやうに
霧の湖がきら〳〵と金のやうに
そして湖に反射した光は
丁度水に沈めた剣のやうに
閃めきふるへてゐます
この界につゝまれて立つてゐる
おう私にはそれだけで十分でないでせうか
讃美の聖が今私の喉元につかへてゐます
私はこの空の下に跪いて
喜びに浸つてゐませう



大震災以來の我國民の態度に就いて

日本建築協會副會頭　工學博士　片岡安

一

昨年の大震火災が我國民の舊式苟且の態度に對して最も痛烈なる一大警告であつたとは、今更ら呶々する迄もなき事柄である。而して、識者苟くも口を開けば、必ず斯の禍を轉じて福と爲せと言ふ。吾人も幾たびかこの天のなせる一大警告に對して從來の舊式苟且の思想より目覺めねばならぬことを說いたのであるが、實際我國民殊に大都市の市民の多數が、多少なりとも斯の警告に自覺して、從來の姑息因循なる非科學的生活より脫出せんとする眞摯の態度に移つたかどうか、甚だ覺束なき次第である。大體に於て依然として舊來の不安なる其日暮し式に立戻るべく努力するを見るのであつて、轉禍爲福の代りに、再び時代錯誤の舊式生活を出現しつゝあるような情態である。

傳ふるところによれば、復興審議會の議員は其多數老輩なりし

とは言へ、現代政治界の重鎭と稱へられて居るものであるに拘はらず、帝都復興計畫の審議に際し其の原案計畫を批難して單に復舊せしむるを以て十分なりとした。而してその原案なるものを覽るに、燒失區域に對する街路計畫の最小限度の改善案に過ぎないのであるから、それさへも不可なりとして復舊を目標とせよと言ふその精神を諒解することは、苟も現代の文化を知る者の齊しく不可能とするところである。果せるかな、復興審議會多數議員の斯る批難は一般人士の嘲笑の的となり、彼等の頑迷固陋の態度を曝露したのは、寧ろ痛快な事柄であつた。しかるに、頑迷なる者は獨り審議會の老人輩に止まるのではない之を嗤はんとした者の大多數は、矢張り五十步を以て百步を嗤はんとする者なるを知るとき、吾人は我國民の前途の爲めに長大息せざるを得ないのである。

二

帝都復興評議會に於ては、原案を支持するの意見より更に進んで、土地區劃整理を燒失區域全部に亘り斷行せよと、言ふ積極的手段を可なりとした、之を原案に於ては一小部分の土地區劃整理をなすも全般に亘りては土地買上の方法に拘泥したからである。評議會は更に進んで、防火建築の促進助成が街路系統整理と共に新都市の骨子をなすものであるから、土地區劃整理斷行と同時に土地買上の費用約一億圓を緊縮して防火建築助成にそれを充當せよと決議したのであつた。吾人は評議會の委員が一致して原案を支持し且つ斯の附帶決議をなしたことを以て委員全部が都市改造の眞諦を解せりとなすものではないけれども、少くとも發案者の意見を諒解するだけの常識のあつたことを信じ得るのである。

然るに政府の當局は評議會の附帶決議たる土地區劃整理と燒失區域全般に亘り施行することに同意しながら、防火建築助成の爲めにはその原案たりし二千萬圓をその儘に據置き評議會の決議たりし一億圓

案には同意せなかつたのである。而して此の修正原案は昨年の臨時議會に提出された時に議會の大多數により更に一大削減を受け、土地區劃整理の斷行さへも不可能ならしむるやの嫌ある程度にまで修正されてしまつたのである。世の識者はもとより政府當局に於ては、斯る不徹底なる修正に對して非常に憤慨したので、內閣はその爲めに一時辭職すべき運命にまで立到つたことは周知の事實である。吾人は、何故に內閣がその時に辭職せざりしやを質するよりも、寧ろ何故に斯る不徹底なる修正案を作成して之を議會に諮りしやを批難せざるを得ないのである。議會に於て土地區劃整理事業豫算の一部を削減し、之を自治體に移さんとしたことの如きは、斯の大事業に對しては枝葉の一小策に過ぎないのであつて、其事業の遂行を多少なりとも不便にしたと言ふ點には、大なる改惡であるけれども、修正の精神そのものは必ずしも鼓を鳴らして彈劾すべき程のものではない。之を言ひ換ふれば、昨年の臨時議會に提出されたる政府の復興案こそ根本に於て一大缺陷を有するものであつて、議會に於てなされたる彼の部分修正の如きは枝葉の問題に過ぎないのである。

抑も都市の災害は大火を以て最も恐るべきものとする。殊に我國の如き木造家屋の衆團たる都市に於ては其慘害の殊更に激甚なるべきは我國の大火の歷史が過去二千年に亘りて明に之を證據立てゝ居るのである。本誌第一卷第一號の卷頭論文に吾人は其の災害の恐るべきを說いて以來茲に七年間、凡ゆる機會に凡ゆる方法によりて、其災害より免がるゝことの緊急なるを論じ盡したのであつた。又大正七年都市計畫調查會が設置さるゝに至つた主要なる動機は、我國の都市建築の不秩序不堅實なる情態を改善向上せしめんとする一大運動であつたとも事實である。而して其結果都市計畫法と市街地建築物法が先づ六大都市に施行さるゝに至りたるは、其目的が交通の利便、保健の向上等、都市生活の各般に亘るのであるが、其根本に於て都市生活の安定を得るにあるは言ふ迄もない。而して都市生活の安定を破る最大破壞力は都市大火であるとすれば、都市計畫の凡ての立案は其大火に對する防禦を以て基礎的條件とせ

ねばならぬ筈である。歐米の都市が凡て其中樞區域には原則として木造家屋を禁じ、且つ防火的設備の萬全を期する點に於てあらゆる拘束と奬勵をなして居るのを觀ても、防火的都市を建設することが都市計畫に附隨する不可分の最大條件であるを識るのである。更に此度の大震火災によりて我國民は切實に其破壞力の如何にも恐るべきものであるを體驗した結果、我々の都市改造の計畫には如何なるものたりとも其防火設備を先にすべきであるを自覺した筈である。

然るにも拘らず政府當局の立案せる今度の復興計畫の內容は交通の利便を考ふるに偏し、都市大火を防ぐべき防火建築助成を餘りに輕視した嫌がある。素より都市中樞區の建築物を普く防火的ならしむることは防火地區の制定と建築物法の勵行により之を實現し得ると言ふ見解もあるが、そは唯一箇の理論であつて此回の如き非常の慘害を受けたる都市民に對して夫れを强ふるは可なり無理な注文であり、又其結果として其實現を非常に遲らしめることゝなる。防火建築助成を大々的に斷行するの趣旨は即ちその實現を可成急速ならしめるにある。復興評議會は斯の意味に於て政府當局に對し其助成に力を盡くすべく慫慂したのであるが、之を採用するの餘裕がなかつたのは復興事業の成功上遺憾此上もなきことであつて、政府當局者の自覺甚だ不十分なるを慨嘆せざるを得ないのである。

三

帝都復興計畫は復興院の廢止、同審議會及同評議會の廢止より轉々して今は內務省の一局により施行さるゝことゝなつたのであるが、其根本計畫に於て已に第一步を誤りたる以上、今更ら同局に於て防火建築助成の項目を擴大することは或は困難であるかも知れぬ。けれども帝都及橫濱の燒失家屋延坪約六百萬坪の內せめて、其四分の一即ち百五十萬坪のものを防火的建築物たらしめることに其方針を立直し其助成として其豫算を七千五百萬圓とし、既定の二千萬圓を支出した以後の分は更に適當の時機に議

會の協賛を經べく決定されんことを希望せざるを得ないのである。防火建築の實施には其工費は木造家屋のそれよりも延坪一坪に付き平均約五十圓乃至百圓の增額に過ぎざるも、改造都市主要地區の大部に亘りての實現を見るには一坪約五十圓內外の補助を與ふれば其強制は容易に行はれるのであるから、此際我帝都の改造的建設を促進するには斯の方針を採ることを以て最も賢明なる復興計畫と言ひ得るのである。土地區劃整理が如何に理想的に出來上ればとて一朝の火災によりて全滅する如き都市が再現するようなことがあつては、昨年の尊き大災害の犧牲は全く無意味に葬られるのであるから、斯の時機を失せず防火地區の擴張と其建築物の促進に就きて深き考慮を拂はれんことを當局に望まざるを得ない。更に進んでは我國の一般都市民の自覺に俟ち、都市生活の眞實の安定の爲に各自の建築物は可及的防火構造ならしめ、其都市をして將來永久に大火の慘害なからしめたいのである。

四

上述の帝都復興計畫に關する卑見は更に他の各大中小の都市にも之を移して其覺醒を促さゞるを得ないのである。關東大震災の當時その慘狀を見聞せる他地方の人士は大震火災の爲めに被むる損害の如何にも甚大なるに鑑み、それ〴〵の都市の一般工作物を可及的急速に改善して其災害を輕減すべく極力努力せんと考へたとは、その當時の世相として十分に之を認め得たのである。吾人はその覺醒の遲かりしを慨みとせしも、尙且つ其等の眞面目の意見が世論となりしを見て我都市生活の安定の爲めに一大福音なりとして之を祝福したのである。殊に我大阪市の如きは一億二千萬圓餘の都市計畫第一期事業に着手せんとする時であつて、其計畫に對する改善案や促進策の急要なるは可なり眞劍味に唱導されたのである。然るに震災後時日を經るに從ひ、喉もと過ぐれば熱さを忘る譬にいれず各方面とも日に冷淡なる情勢に復歸し今日に於ては市民の大多數に殆んど都市大火の危險に就いて考へ居らざるやに見受けらる。

如何に其日暮し式に慣れたる國民なりとは言へ餘りに又憐むべき態度ではないか。必ずしも震災に伴ふ大火と言はず今にも失火と暴風と一致して大火を惹起せんか、我大阪市の如きは或は數億の資本を失ひ數萬の人の事業を奪ひ、市全體を擧げて數年間再び起つ能はざる如き一大損害を受くるものと見ねばならぬ。斯くの如くその罹災の可能性が明に知悉されながら其對應策が閑却さるゝことは、寔に不可思議の現象であつて、吾人はその煮え切らざる態度を理解するに苦しむのである。

之を要するに、我國民は物事の眞相を探究するの眞劍味を缺ぐと言ふ一大缺點を有するのである。大火の慘害は何故に生ずるか、其慘害を輕減するの方法なきかと言ふことは大慘害のあつた時には、常識ある者必ず先づ考へ及ぶところである。若し歐米人であつたならば徹底せしめるのであるが、我國民は其の時に於ては相當の緊張味を有つて居ても、其探究に際して漸次眞劍味を失ひ終にはその事柄を有耶無耶に葬り去るを普通とする。此回の大震火災の大慘害に直面したその當時は、可成り眞面目に不燃質の都市耐震的の都市を考へたのであるが、時と共に其考は何處へやら消へ失せ、再び不徹底な復舊を以て滿足せんとする空氣に覆はれて居るのは、寔に遺憾の極である。而してその主たる原因は上述の如き我國民性の缺點にあるは言ふ迄もなき事ながら、之を更に具體的に觀察すれば、我國民の大多數は未だ都市生活の眞諦を理解せず又建築物に對する智識を缺ぐからであると觀ることが出來る。此回の大震火災に於て如何に都市生活が共存共榮の理論の上に徹底して居るものであるかを示し、其損害の殆んど全部は建築物の脆弱にして燃燒質であつた爲めであることを明かにしたのであるから、我國民が將來永遠にその繁榮を期せんには、先づ都市生活の共存共榮である眞相を理解し、其建築物の完全を期せねばならぬのである。吾人は大震後最近の我國民の態度を見て特に其感を深ふせざるを得ない。

都市計畫と建築家

加藤善吉

一

都市計畫が實行せられたる曉の利益と、この計畫がなかつたならば市民生活が將來如何に悲慘なる運命に陷るかは今更茲に述ぶるの要はない。ただ都市計畫は如何なる觀念のもとに計畫さるべきものであらうか、これがためには都市計畫と建築家は如何なる關係を有し、これまで如何なる因緣を結びつつ來つたかを述ぶればよいのである。

二

沂世都市計畫の萠芽は伊太利に發して佛蘭西に入り巴里の莊麗なる都市計畫を完成するに至つたのであるが、三十年戰役の終りを告ぐるや獨逸に於ては都市計畫の實行と共に伯林『カールスルーヘ』『ヂユツセルドルフ』等も面目を一新するに至つたのである。是等の都市計畫は元より其の目的とするところは帝王の威嚴の誇示と而して都市の美化にあつたので、今日の都市計畫とは其の性質を異にするものであるが、之れが一般の都市計畫に波動したる其の影響の甚大なる何人と雖も之れを肯定せぬものはなからう。

今日の都市計畫は人生の凡ゆる方面に觸れてその生活の改善と、社會の凡ゆる問題に對してその利益の增進とを目的とするものであつて、其の計畫は綜合技術として凡ゆる技術科學の結晶たることを要し

事業の完成は之れを綜合藝術の表現として之れを見るものであらねばならぬ、勿論如何に完全なる都市計畫と雖も、それが單に紙上に線を引く丈けの仕事に止まり、或は單なる法令の制定のみに止まるならば何等の價値なきものであつて、之れを市民生活の實際に觸れて實行の伴ふものであらねばならぬ。而して其の計畫に於て或はその實行に於てこれを建築の方面より見むか、その關聯するところの極めて密接なるものであつて、都市計畫のあらゆる問題は一として建築に關せざるものなしと謂ふも過言ではなからう。

三

都市は建築を以て構成し建築を去つては都市の存在はないのである。而して又都市の生活を象徴する主なるものは即ち建築である。吾々は建築を見て其都市に於ける時代生活の實相を知るのであつて、建築の問題が都市計畫中に於て最も重要なる部分をなすのも此點にある。殊に近代都市計畫の普遍的運動として各國を風靡して居る地域制（Zoning）の問題に至つては其の活用須く建築家に俟たねばならぬ。茲に於て建築家の責務の重且大なるを自覺し、その主命に依つて始めて眞なる都市計畫をなし得るものである。故に歐米に於ける從來の都市計畫の骨子は建築家の靈腕に成れるもの多くして、一六六六年英國倫敦大火の後に當つて直ちになしたる雄大なる復興計畫も當時市民の入るゝところとならずして、之れを實現するを得なかつたのであるが、都市計畫に於ける新時代の警鐘となつたことは明かである。この計畫は世界的建築家の一人たるクリストファ・レン卿に依つて成されたるものである。又莊麗なる巴里の都市計畫を大成したるものはバロン・ホッスマンであるが、其の計畫に於て路易十四世は當時の建築家に命じて之れを立案せしめたるものであつて、今日世界に誇りつゝある美麗を極むる『アヴニュー』や『ブールヴアール』を有して居るのも畢竟コルベール・ル・ノットル・ブロンテル其他のアカデミー派の

建築家に負ふところ頗る多いのである。

全世界の視線を集めつゝある市俄古市の雄大なる都市計畫に至つては今日米國都市計畫の開山として有名なる建築家故ダニエル・バーナム其の人の計畫である。其の卓越せる識見と絶大なる能力とは何人と雖も之れに敬服せぬものはなからう。

又國際都市計畫案なるものもヘンドリック・クリスチン。アンダーゼン。アーチストエム・ヘブラード。ボントルー。ポールアタム等相率ひて歐洲の建築家と鼓頑して世界人道主義の下に平和の進捗を遂げしむるために國民の連盟を作らむとするを理想として案出したものである。

其他地域制の問題に關しては行詰まれる都市の混亂の矯正と衞生上の問題を解決すべく、米國に於て始めて綜合的地域制を認めたる紐育市の其の高度地域（Height District）の制定にヒントを與へたるものは米國の建築家ダヴエト・ニツケルバッカー・ボーイド氏の提唱したる建築物のセットバックに因るものである。かくの如く歐米の都市計畫に於ける建築家の識見と手腕とは共に躍如たるものである。近來我國の建築家に於ても大に論議せられるやうになり殊に昨秋突如として起りたる關東の大震火災以來この都市計畫なる問題に關して一新を劃したる如く、國民の輿論昇佩として起り、吾々をして災害を轉じて福となすの敎訓を與ふるに至つた事は、災害そのものは實に悲慘なるものであるが、之れをしてせめてもの慰めとせねばならぬ。

四

都市計畫は如何なる觀念の下になさるべきか、既に形成されたる都市の發展擴張の趨勢に對する計畫の理想及實現には國民の生存するところの凡ての周圍に群がる歷史、氣風及慣習の研究、又之等に對する周到なる觀察の必要と社會の精神と其の要望を尊重して正當にして秩序ある方法に於て、都市計畫者

に依つて注意深く計畫されねばならぬ。人をして驚かしめつゝある市俄古市の計畫に當つては、其の最も重要視されたるところのものは、都市として必然起るべき人口の集密の問題、交通運輸の問題及一般の衞生問題は都市の將來に留意すべき三大要素として、其の計畫に於て絶へず計畫者の念頭を去らなかつたところのものである。然しながら此等の問題も要するに建築の問題に發して居るのであつて、今日紐育市の混亂錯雜の狀態は土地及建築の所有者が、或は事業家が、其處に働く人々の何れより來りて何處に歸り、如何なる行程の下に集り來るかを考察せずに盛に高く、高層なる建築をなしたるがために、建築敷地の面積、建築物の高さ、建築物の適當なる配置に對して餘りに放縱であつた結果である。茲に於て都市計畫は土地政策の要求に基き都市の外觀であり內容である。建築が平面的にも、立體的にも合理的發達をなすべく企圖するの觀念の下にあらねばならぬ。即ち都市計畫は其の平面的計畫となすに於ても常に立體的考察を怠つてはならぬところのものである。

先般建築學會に於てなされたる早大の佐藤博士の講演の內に『スリーデメンションの觀念のないものは完全なる都市計畫をなし得ざるものである』と謂はれて居るが、私も常に其の必要を考へて居つたので、あの一節が私に強き感じを與へたのである。實に吾々の世界は明確にスリーデメンションの世界である。而して之れを十分意識し十分之れを活用する人は世界の進步に貢獻し將來の第一建設者である。然るに現代に於ける吾々の多くはツウデメンションにのみに於て生存しつゝあるの感がある。吾々は吾々の周圍を見、吾々は屢々物を疑視するが而し見上ぐることをなさぬ。換言すれば凡ての計畫に於て平面的考察をなす場合に於て同時に當然なすべき立體的考察をなさぬ。かくの如き計畫は完全なりと謂ひ得るであらうか。決して然らず都市計畫の如き廣き範圍を有し、長き月日を要し、大なる識見と能力を要し、深き考察の下に明るい、而して內容の充實するを要するものにあつては其の計畫に當つては周到なる準備の下に左に右に、前に後に、而して厚さ深さに對して遺憾なき考察をなして計畫されたるもの

こそ始めて其の意義をなし其の完璧を期し得るものである。

五

道路計畫は都市計畫に於て其の主要なるものであつて道路は即ち都市の神經系であり、血管である。之れは社會全般の秩序ある發達に對して勿論交通、保安、衞生上の見地より十分之れを考察して計畫さるべきものであつて、住居地域の如き安靜を要する部分に對しては殊更に注意して危險、騷音及煤煙の伴ふ不必要なる交通機關の計畫を避くべきである。而して又道路は其の兩側に櫛比する建築物に對して必要なるものであつて、此の點に於て道路は建築物と重大なる關係を有するものであることは疑ひないところである、實に道路は建築物を支配し建築物は道路を支配するものであつて、即ち社會的生活の動脈である。この點に於て道路は交通の利便を重むずるは勿論であるが、同時に建築物の對稱關係に於て不斷の考察を必要とするものである。而して又建築物と同樣市民の審美心に訴へて多方面の趣味を喚起せんとすべく腐心すべきである。

原則として建築は道路計畫の確立して後なさるべきものであるが、之れを歸納的に考察すべき場合が生ずると思ふのである。即ち建築物の必要より道路を計畫すべき場合がある。假令ば或る都市に於て平面的考察の上に於て其の道路計畫は完全なりとするも都市の美觀なる見地より一部に特に重要なる建築の出現を要する場合ありとせむか、其の場合に於に道路に支配せられて期待すべき建築をなし得ざる場合ありとせば甚しき不都合を生ずるものである。長崎市の如き港灣に面し背面山を以て圍まれたる都市にあつては灣上よりの仰望に對して建築物の配置に關して相當考慮を要すべきである。長崎市の當局に於ても此點に關して充分なる調査を行ひ、灣上に舟を浮べて都市を仰望し見ゆる範圍を劃線し、此の圍内に於ける建設物に對して或る制限をなさむとするの方針であると聞えて居る。之れと同樣なる一例は

二三年前までは我國が獨逸の後を受けて全力を傾注して今日あらしめたる我が保管都市であつた支那青島市街の計畫の當初に於て、獨逸當局は膠州灣上に數限りなく舟を浮べて市街を仰望し、都市計畫の參考に資し建物築の適當なる配置に對して腐心し、之等に必要なる道路計畫をなしたるは必竟するに都市の立體的考察の下に道路計畫をなしたるものである。即ち道路計畫はスリーデメンションの觀念の元に平面的考察に於て常に立體的考察を忘れてはならぬ。其他合理的計畫の要點に關しては理想的公園、遊戲場學校に於ける廣庭及地域に於ける空地の計畫等は忘れてはならぬ主要なるものである。又旅行者の最初に於て、或は最後に於て深き印象を與ふるところの都市の玄關なる停車場の配置と之れに必要なる一般交通の道路、徒步運動に對する安全なる廣場、電車の通ずる道路、是等の三つの循環に對する廣き面積の計畫、及待合所の周圍に於ける空地に附加する花壇、噴水、及立像の美に對しても十分の考察をなさねばならぬ。實に都市の向上發展と市民精神の發露とは光輝ある鐵道に於て大なる誇をなし得るものである。而して之等の凡ての計畫されたる時に於ては市民の趣味、慫慂したる美の伴ふべきものであらねばならぬ。

而しながら今日の都市計畫は社會政策的の都市計畫であり、商工業の發達を目的とする都市計畫であつて、都市の美化を理想としたる都市計畫は既に過去のものであり、中世紀の都市計畫であると謂はれてゐるが、元より巴里の都市計畫の如きは帝王の威嚴を示す必要より發したるものであり、都市の美化を目的としたるものであるが、之れに加へて當時の復興期に於ける時代思潮は、いやが上にも之れを助長せしめたるものであり、不用意であらねばならぬ。人間は須く審美心を有し、あらゆる物體に對し、あらゆる現象に對し美を認識し、美を肯定せぬものはなからう。都市に於ても美しき都市を要求し、美しき建築を要求し或は美しき道路を欲するは人間の常情である。即ち都市の美は吾々の眞の生活に根底を有し其の要求よ

り發したる美であつて、決して巴里の如き帝王の威嚴の表示に依る美、或は虚の美、或は僞の美であつてはならぬ。之等は元より排すべきである。此の點に於て都市計畫は都市を一の有機體と見て其の統一的美の完成を想見して計畫さるべきである。

六

地域制の運動が都市の秩序ある發達に常に効果の多きをなしつゝあるは事實である。先に米國に於ては紐育市の市街はコンジョン・ストリート即ち溪谷街の增加甚だしく衛生保安上の問題は勿論都市生活の危期に迫たので、米國の建築家ボーイド氏は立つて、米國の猛烈なる商業主義の精神が勢力を有して建築は益々嵩加甚しきものあるに對して高さの制限をなすの必要を力說した。彼は街路巾の一倍四分一の比の高さに於て、卽ち五十呎の幅員を有する街路に面する建築物は高さ六十二呎半に於て最初の後退を開始し、階數に依り漸次後退すべきを提唱したのであつた。其後八年を經て之れが實現さるゝの期に達したのである。それは紐育市に始めて質合的地域制の制定を見たその時である　紐育市が地域制を採用して以來各都市相繼ぎて採用し、今日に於ては佛國を除く各國を風靡するに至つたのであるが、今日に於ける紐育市の高層建築に於ける市のスカイラインはこの地域制の產物であつて、今後五六十年を過ぐるに於ては紐育市のスカイラインは面目を一新するであらう。之等都市計畫に於ける地域制の將來に於ける都市建築は、一個一個の建築に對するンメトリーの美を要求するばかりでなく、一街區に對して其の群る建築を大なるマスと見て、之れに於いて重要なるエレベーションの均衡を要求するに至るであらう。

地域制は實に都市計畫に於ける重要なる部分をなすものであつて、本制度の其の都市に合理的なるや否やは直に都市の發展消長に及ぼすところのものである。今日歐米に於ける地域制は土地に依り其の用

途を異にする用途地域制と、土地に依り建築物の高さを異にする高度地域制と、空地面積を異にする面積地域との三制度に分類されて之れ等が各々必要に依つて別個に全市に設定さるゝものである。我國の地域制は本誌に於て既に述べたる如く、建築物の高さ及空地面積が用途地域に從屬して規定されてあるがために住居商業地域、工業地域等其の地勢の關係、或は地質の硬弱に關係なく規定の最高限度に建築し得るものである。故に假令ば商業地域にして地勢其他都市狀態の關係に支配せられて建築物の高さの限度を異にする必要の生じたる場合に於ても如何ともなし得ざるものである。此點に於ても吾々はより完全なる地域制を望むものである。(地域制に關しては改めて述べやう)實に地域制は土地政策の基本をなすものであつて百般の計畫之れに因つて定るものであるが、而し謂ふまでもなく地域制は當然起るべき其の結果に對して周到なる考察をなし、而して合理的都市計畫を導くべく用意せねばせねばならぬ。之等の問題は須く建築家の理解ある努力に俟たねばならぬ。

七

要するに都市計畫は交通・保安　衛生の問題の考察の下に經濟問題に立脚して、其の計畫者は人生のあらゆる問題に觸れ、凡ゆる技術を包合し、且つはスリーデメンションの觀念と美術的思想を有するものであらねばならぬ。而して計畫者は其の計畫をして藝術的表現を有するところの結果を招來するに適當なるものであらねばならぬ。之れが即ち其の職責の最も重要なる部分である。又建築の第一の永久的改善は合理的計畫を企圖する目的に於て都市の發展を計畫する都市計畫者に依つて始めて完成さるべきものである。この點に於て既に言及したる如く、工學上の問題、美學上の問題に關する識見と能力を有し、それが此の職に重要なるものであり、而して又廣き人間性の直觀的資格を有し、廣汎なる智識を修得する建築家の敎養の中に含まれる訓練は都市計畫をなすべき適當なるものであらねばならぬ。都市計

畫・少くとも其のオリヂナルプランニングをなすべき職責が建築家が適任であり、而してそれが此の職責に對して當然なる歸結であると謂ふことに對しては、そこに何等の疑問もないのである。此の點に於て建築家は宜しく都市計畫に參與して完全なる都市計畫の完成に努力せねばならぬ。（一三、二、一七稿）

春の鳥鳴きそ鳴きそあかくと

外面の草に日の入る夕べ



學說

「コンクリートブロック」より鐵筋「コンクリートプロック」まで（三）

——附　中村式鐵筋「コンクリート」に就いて——

中村鎭

一　序　論
二　中空構造論（複　造論）
三　構造法の發達と其種類（綜合的構造法への道）
四　鐵筋「コンクリート」建築構造の得失
五　中空構造としての「コンクリートブロック」及び「ホロータイル」の發達
六　鐵筋「コンクリートブロック」（綜合的建築法）の出現
七　中村式鐵筋コンクリートブロックに就いて

鐵筋「コンクリート、ブロック」に就て、私は數年來研究し又實驗した多少の意見を有つて居るので何等かの方法に於て、纏めて發表したいと思つて居た。嘗て雜誌「建築評論」や「建築世界」に其の一部を發表しかけたのであるが、途中から病氣になつて止めてしまつた。今此處に、十分とは行かないけれ共、研究の概要を發表して見たいと思ふ。

H『ブロック』製作

『ブロック』の製作に就ては、又非常に多く述ぶ可き事があるが、此處には唯其製作法の別と其特質を概説するに止める。

『ブロック』の製作法に二種ある。

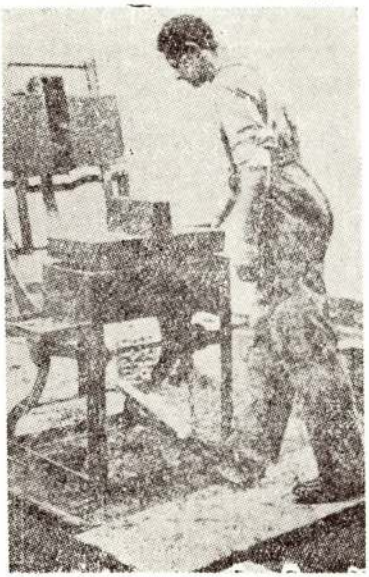
（一）『コンクリート』を硬練りとして直に型より抜き取る法（落雁式製法）

（二）『コンクリート』を軟練りとして一日後に型より抜き取る法（羊羹式製法）

（私は一及二に落雁式とか羊羹式と云ふ菓子の名稱を附した。是は甚だ低級の様であるが最も其性質を明瞭に表すので通俗的に非常に良い説明法だと思つて是を用ひて居る）

（一）は『コンクリート』を硬練りとし（ドライコンシステンシー）の最も水量少きもの、水量は殆ど六乃至七パーセント位にしかなつてゐない）是型を内に入れて十分の壓力を加へて直ちに抜き取るのである。抜き取つた後は、一時間目位から噴霧器の類で少量の濕氣を供給して、其最初に於ける水量の不足を補ひつゝ、初硬化を爲さしめる。丁度落雁式製法である。第十三圖及第十四圖は之等硬練のブロックを小器機の型で抜いて居る處である。一つはT形、一つは箱形である。

第十三圖　T形ブロック製造器械



（二）は是に反して軟練として（水量は十二、三パーセント位）型内に隈なく流れ込む様にし其多少硬化するのを待つて一日後に型を取外す。

一と二との比較は勿論一の方が二の方に優る事幾倍であるか知れない。二は形の複雜な爲め止むを得ず爲す方法であつて、軟練りなる爲其強度の非常に弱きは勿論とし其型を要する事夥しい爲め決して安く上らないといふ缺點がある。

第十四圖　箱形ブロック製造器械



第十五圖は『コンクリート』が使用水量の多少に依つて如何に强度の差のあるかを示したウォーター、レシヨー、カーブの圖表である。

I『ブロック』の施工と『ブロック』の大さ

『ブロック』は普通石又は煉瓦と同樣にして積立てるのであるが、其施工に當つて如何なる大さが最も適當であるかは非常に重要な又非常に難かしい問題である。

是に就て常に敎へられる事は、嘗て昔日に於て『ブロック』と同樣に石の代用品として製せられ使用せられた煉瓦が如何なる道を歩んだかと云ふ事である。

煉瓦は幾千年の經驗の結果、今日の樣な片手で持てる大さのものになつたのである。片手に煉瓦を持ち片手に鏝を持つて積行く時は最も早く施工する事が出來る。併も其煉瓦を持つ左の片手が終日の作業に疲れない程、樂なものでなければならぬ。是が煉瓦をあの小い形にした最も重なる理由であつた。此尊い經驗を注意深く研究する時、石の經濟的な代用品として用ひらるゝ『コンクリートブロック』が是と同じ道を歩んで、煉瓦と同樣の處に進むであらう事は最も自然に考へられる事である。併し又此處に『コンクリートブロック』が煉瓦と全く同じ道を歩むとすれば何も煉瓦の代りに『コンクリートブロック』が出來る必要はないと云ふ事である。そして更に『コンクリートブロック』は中空たるを主なる理想として居るのである。さすれば目的は同じでも歩く道は實に古代の道で

なくて近代の道であると云ふ事になる。其時に於ても『コンクリートブロック』は尚煉瓦と同樣の大さになつて來るかどうかと云ふ疑問である。

此點に於て今日の『コンクリートブロック』は皆其方針が定まつてゐない。そしてその大さは主に石の大さに倣つてゐる。

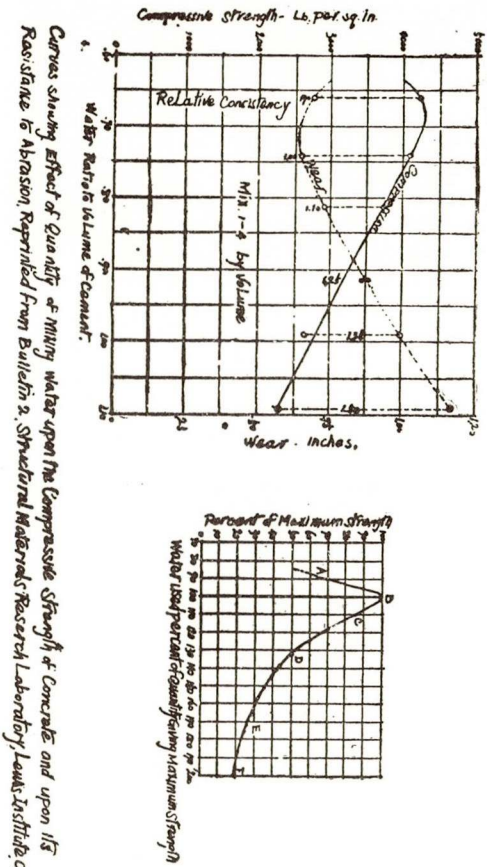
處が石と同樣の大さにすると云ふ事に依つて『コンクリートブロック』の進歩の流れが堰止められて居る事は實に夥しいものがある。

其困難とする理由を指摘すると實に次の如くである。

（イ）普通石は一立方尺以上の大さに切出されるが建築の樣な複雜な要求を滿たす爲めには實に幾十種幾百種の異形を組合せなければ十分でない。それで石割りをなして夫々の形を決定するのであるが、若し『コンクリートブロック』が同樣の目的を達する爲に石に代用せられ、又石と同じ大さで進むとすればやはり同じ丈けの異形を要する事となる。是は『ブロック』の型を幾百種にする事になつて、非常に不經濟なものとなしてしまふのである

それでは、その幾百種の異形を除き石割りの面倒を除かれるには

第十五圖　使用水量と强度との關係を示す圖表



Curves showing Effect of Quantity of Mixing water upon the Compressive Strength of Concrete and upon its Resistance to Abrasion, Reprinted From Bulletin 2, Structural Materials Research Laboratory, Lewis Institute, Chicago

どうすればよいかと云ふと、やはり煉瓦の様に極小さい形にしなければならぬと云ふ事に舞戻つて來る。煉瓦の様な小さな形にすれば、異形を減ずる事は、非常に樂であるが、中空は其爲に活用し難いと云ふ事になる。斯く問題はどこまでも循環して行くので如何にしたら宜いかと云ふ結果が附かない事になつてゐるのである。

現在では、箱形の『ブロック』に於ては約一立方尺から〇・七立方尺位の大さが最も多く用ひられ組合せ『ブロック』に於ては約・二乃至・三立方尺に當るものが多く用ひられて居る。是等のものは恰も、瓦の場合に平の棧瓦が大半を占むるものではあるが之に數種の異形（ヤクモノ）を用ひて始めて完全に一つの構造を完成して居るが如く數種のヤクモノの助けに依て構造されるのである。是等は大小の差こそあれ何れも片手で、是を樂に處分する事は出來ない。それで職工は是を積立てるに當つて、何れも兩手を以て成し遂げて居るのである。是は先にも述べた通り非常に施工の迅速を妨げてゐる。

此難問題に付て私は可成り永い間の研究を重ねた上（『コンクリートブロック』は必ず煉瓦と同様に片手で持ち得る大さ重さでなければならない。それであつて尙且中空が理想的に出來得るものでなければならない）と云ふ結論を得た。只結論を得たばかりでなく、その十分なる可能性を私の考案した『ブロック』に於て發見した。此事に就ては後に中村式鐵筋『コンクリートブロック』構造に就て論ずる時に今一度其實際的說明をしたいと思つてゐる。

『ブロック』の面表仕上の問題

『ブロック』の表面仕上に就ては大體二つの區別がある。一は『ブロック』の面を、そのまゝ現はして石積の如く、化粧目地を施す方法と、二は『モルタル』『タイル』其他の被覆材料を以て被覆する方法である。

一は『ブロック』其ものゝ形態を現すには最もよい方法である。が元來『ブロック』が先にも述べた通り、石の安價な代用品であるといふ立場から自然と石の形態を模倣する様になつて、瘤出しとか

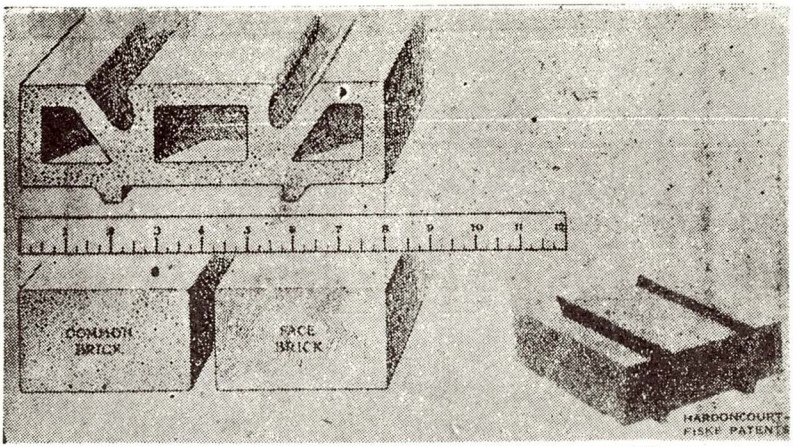
縦の筋入りだとか、江戸切りだとか云ふ様な方法が用ひられてゐる。唯是の缺點とする處は目地から屢々雨水を滲透せしめる事があるといふ事である。私も之に就ては苦い經驗を持つてゐる。

第二の表に他の材料を以て被覆をやる方法は、雨水の滲透を防ぐと云ふ方法に就て可成に結果が良い。唯之と第一のものと比較すると、少しく高くつく慨みがある。然しどんなに良く仕上げても『ブロック』自身に依る石の模倣(即第一の方法)は結局其形態といひ、其色彩といひ、『石の安價なる模倣』の意味を其表現に於ても脫却する事を得ない。でやはり『ブロック』自身の眞の表現は何等かの被覆材料を用ひて『ブロック』個々の姿を消しつゝ、其の大體の形態に於て是は『ブロック』造に依る建築である事を感じ得られる樣な自づからなる表現に向つた方が其の領域が遙かに廣く且つ『ブロック』を使用する本來の精神に遙に適合するものであると私は考へる。

K『ホロータイル』に就て

『ホロータイル』に就ては『ブロック』と同樣の詳しさに於て述ぶ可き問題が横はつてゐる。然し既に『ブロック』に於て研究され論及された問題は是を殆んど悉く其まゝ『ホーロタイル』に應用し得ると云ても差支へない位である。唯是が『コンクリート』製品であるか陶製品であるかの本來の性質に依る點丈が僅に相違してゐる。即『ホロータイル』は一般に陶製品である爲に『コンクリート』製品よりも、薄手に且つ輕量に造る事が出來る。が一方に於ては『コンクリート』製品よりも、遙に弱いといふ慨みがある。薄手に出來る事は、施工上非常に難有い事ではあるが(殊に床の場合に於て)其弱さから來る危險は日本の樣な地震國に於ては到底現實のものとして取扱ひ難く、僅に鐵骨構造又は鐵筋コンクリート構造の幕壁としての補助構造材たるの役目をしか託し得ない唯陶製品である爲に其表面は『コンクリート』と異つて非常に愛す可き粗雜さや色彩の美を出す事が出來る爲め、被覆をしないで其まゝ仕上るのに適して居るのであるが、是も幕壁としての用途に於ける場合にはさうも行かない。

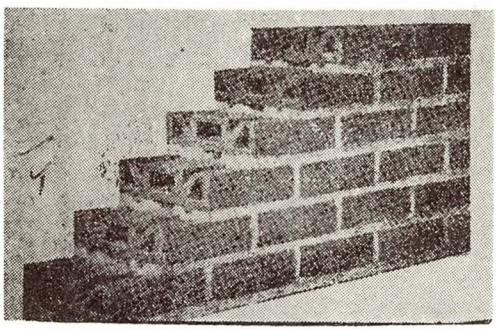
第十六圖　フイスクロツクブリツクと稱する一種の空中煉瓦



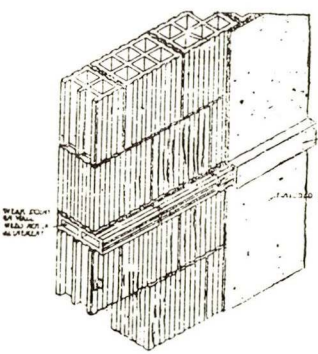
ロツク、ブリツク』と稱する煉瓦一枚積の幅に相當する『ホロータイル』である一つの形態を如何に巧に利

左に二三の『ホロータイル』の例を擧げて參考とする。

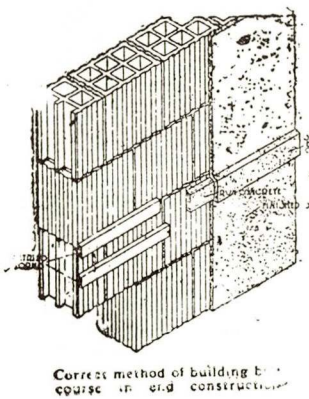
第十六圖は『フイスク、

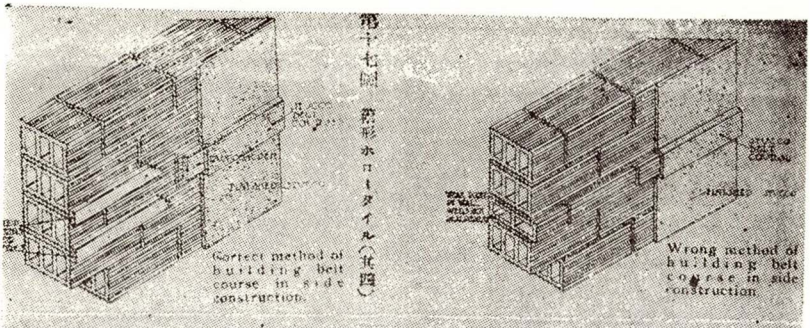


第十七圖　箱形ホロータイル（其一）



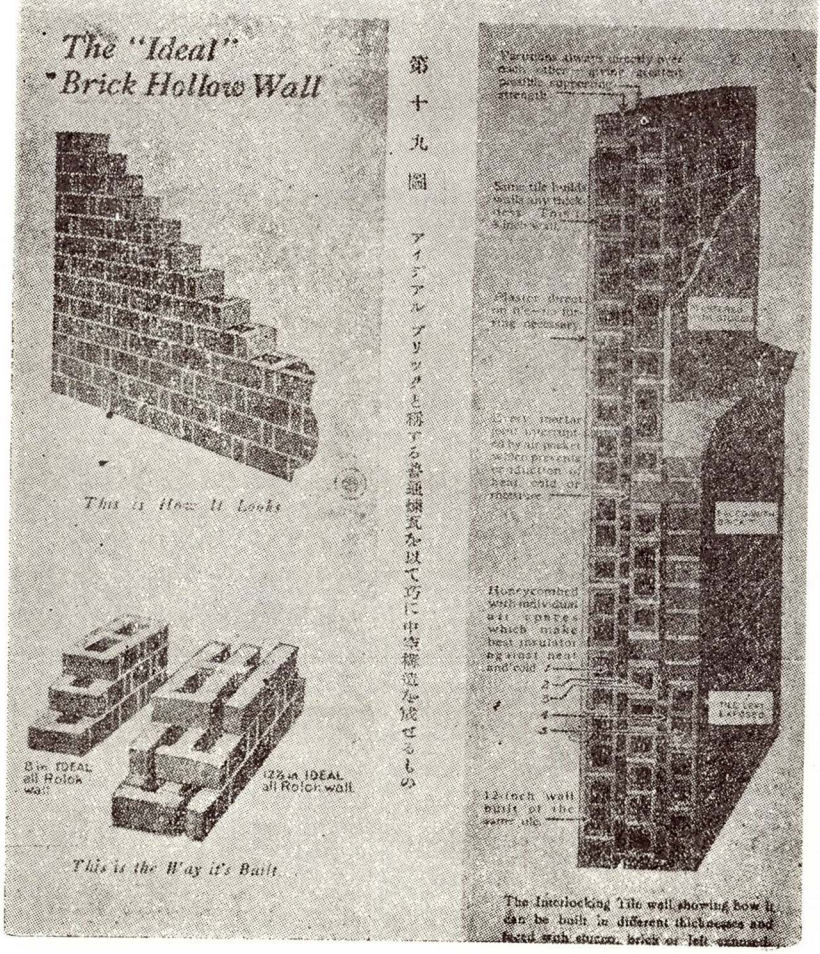
第十七圖　箱形ホロータイル（其二）





第十七圖　箱形ホローターイル（其四）

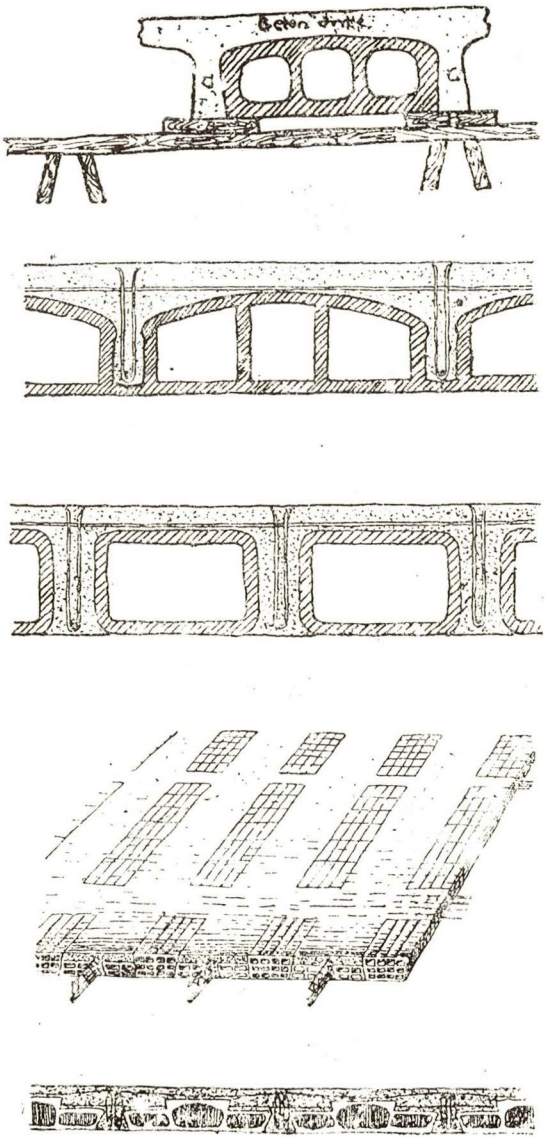
第十六圖　箱形ホローターイル（其三）



第十八圖　インターロッキングタイルと稱する凸字形ホローターイルと其組合せ方

第十九圖　アイデアルブリックと稱する普通煉瓦を以て巧に中空構造を成せるもの

「ホロータイル」と鐵筋「コンクリート」との合成に依る床構造



第二十圖　第二十一圖　「ホロータイル」と鐵筋「コンクリート」との合成に依る床構造　第二十二圖

用して其接續を強固にし又其空間を重ねてあるかは、全體としての強度の點は別として感歎に値するものがある。

第十七圖は『ホロータイル』に於て最も常識的な考案である。其外部に淺い溝を設けて『モルタル』の附着を良くしてある事等も巧妙ではあるが誰にも思付ける方法である。

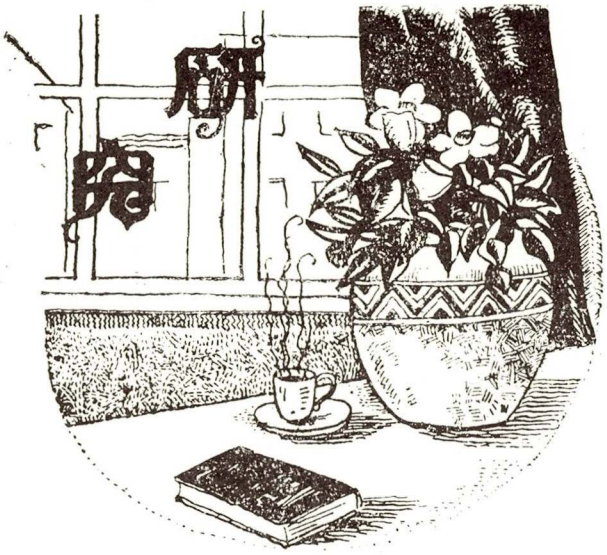
第十八圖は『インターロッキングタイル』と稱する凸字形の『ホロータイル』を横に組合せつゝ積上る方法で、其の巧妙さは可成に驚く可き處がある

第十九圖は普通の煉瓦を巧に組合せる事に依つて其壁體中に一重又は二重の空間を造り得る方法である。是は先に『ブロック』の處に論じた點を參照すれば前三者は箱形『タイル』の一種と稱す可く夫に對して是は組立『タイル』とも稱す可きであらう。殊に其複々壁の如きは今日防水を要する普通の煉瓦構造に於て常に忘れてはならぬ、重要の點を圖示して居ると云つて良い。

『ホロータイル』に就ては、單に壁體構造のみでなく、床構造に於て鐵筋『コンクリート』との合成に依るものが非常によく用ひられて居る、之は構造上に於て大なる成功の一つに數ふる事が出來る第二十圖、第二十一圖、第二十二圖は之等の合成床構造の數例である。

尙この事に就ては後章に『コンクリートブロック』と鐵筋との合成床構造の項に述べる事とするが、此位に止めて更に鐵筋『コクリート』に進むる事としよう。（つゞく）

砂底に湧口澄めり椿池



地震と耐震建築

無漏林樹

一　總　說

九月一日の關東地方の災害は地震のために蒙つたものよりも寧ろ夫れに次で起つた火災のためのもの〻方が多かつたことは事實である。此の火災は主として地震のために潰れた家が火元になつて夫れから夫れへと飛火や延燒をして遂に東京はその過半を燒失し横濱は全燒全滅の慘狀を呈したのである。恐ろしいのは地震そのものよりも火災である。だから地震に際して火災の起るのを防ぐこ

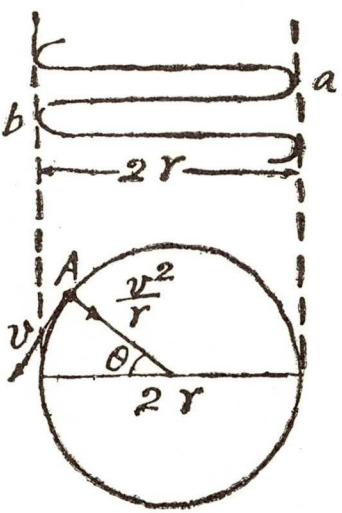
とが最も必要である。之がために第一に行はなければならないことは家屋を耐震的にすることである。地震に逢つても建築物が潰れることがなければ火災は起らぬことになる。譬へ藥品の轉倒や火藥の發火に依つて火災が起つても之等は無暗に數の多いものではないから消防機關に依つてその擴大を防ぐことが出來るが、今度の樣に東京では同時に八十箇所も、橫濱では二箇所も火元が出來る樣では如何に消防機關が完全でも之を防火する譯には行かない。で今私はこの機會に耐震家屋構造について研究して見やうと思ふ。

二震　度二

地震の加速度

地震動に依る橫力のために家屋が破壞されることは明かのことであるが、扨てその地震動の大さは地方に依り場所に依り地形の如何に依て異るものであり、橫力の作用も建築物の構造方法や材料に依つて一樣のものではないから耐震家屋の設計には一應之等の條件を知らなければならない。徒らに地震を恐れ無用の設備をしたり、不合理の補強法を採るが如きは愚の骨頂である。

地殼が彈性體である以上、地震動も一種の單弦運動であつて圓周上を等速度で運動して居る物體の運動狀態を一直線上に投射したものと同じ運動である。



今半徑 r の圓周を v の速度で運動して居る點 A があるとするとその中心に向ふ加速度 a は次の樣になる。

$$a = \frac{v^2}{r}$$

その直線上の投射影は

$$\frac{v^2}{\gamma}=\cos\theta$$

であるから θ が 0 の時最大となる譯である。故に地震動に於ても、例へば水平震動を考へる時はその震動の方向を轉ずる點 a 或は b に於て最大加速度を有する譯である。

又振動の週期を t 振幅を 2γ とすると

$$v=\frac{2\pi\gamma}{t}$$

$$a=\left(\frac{2\pi\gamma}{t}\right)^2\frac{1}{\gamma}=\gamma\left(\frac{2\pi}{t}\right)^2$$ となる。

例へばこの度の大地震に於て東京帝國大學地震學教室の發表に依ると、

週　　期　　$t=1.5$秒

振幅最大六寸　（約十八糎）

$\gamma=9$ cm.

之等を上式に代入すると此の度の地震の本郷に於ける最大加速が出て來る。

即　$a=90\left(\frac{2\times3.14}{1.5}\right)^2=1.600$秒々粍

次に地震動に依つて地面が a なる加速度で右に動かうとすればその地面上の物體は反對に左に a なる加速度で動かされんとするのであつて、其の時物體の受ける力 F は次の如くなる。

$F=$質量×加速度$=M\times a$

今もし物體の重量が W である時はその質量 M は

$$M=\frac{W}{g}$$ であるから

$$F=W\frac{a}{g}$$ となる

茲に a は地震の加速度を秒々粍で表はしたもの g は地球の引力の加速度を秒々粍で表はすものとす、然る時は F は重量 W と同じ單位で現はされる。

各種の建造物が破壞されたり、茶碗や瓶の轉倒されるのも總てこの F の力のためである。即 F は地震力である。

又 $\frac{a}{g}=k$ とすれば

$F=kW$ となつて、地震力の大さは物體の重量と k とに正比例することが解る。この k を

地震の震度と云つて居る。地震學の方では主として加速度 α を以てこの震度を表はして居るが建築學の方では k を以て震度としてゐる。

例へば或る地震に於ける最大加速度 α が一千秒々粍でであるとすると

$$k=\frac{\alpha}{g}=\frac{1.000}{9.800}\fallingdotseq\frac{1}{10}$$

となり W なる重量の物體に及ぼす地震力は

$$F=kW=\frac{1}{10}W$$

即物體の重量の一割の力が地震動と反對の方向に作用するのである。

次にこの横力が建築物の如き架構物に如何に作用するかを考へて見やう。建築物は甚だ複雜なる架構物なる故地震力に依つて如何樣の横力を受けるかは數學的に相當困難の問題であるが、今後の日本の建築構造家は是非ともこの點を微細に計算しなくてはならない。

此處に數學的説明の餘裕はないから他日に讓るとして地震横力に依て起る主要なる應力增加について述べて見やう。

高層建築物が地震のため左右に振られる場合には建造物夫れ自身は地盤を固定點とする肘梁に之に直角の方向の力が作用する時の應力と同樣の應力を受けるものと考へることが出來る。故にその基底附に於ては最大の曲能率を受ける譯である。その曲能率のために生ずる力のうち柱に作用するものは張力側の張力と壓力側の壓力であるが梁や壁に作用する剪力は實に重大なるものである。この張力側の張力は普通建造物の自重のため差引かれて結局壓力のみとなり張力夫れ自身は餘り問題ではないが最も危險のものは壓力の增加である。

從來の建築物の柱は主として死活重の直壓力のみより算定されたものであるが、之等は地震のための壓力の增加に對しては危險である。

今度の震災でも之がために破壞したものも多くあつた樣である。この柱の受ける壓力增加の度は建物中心に於ては零であるが、外方に向ふに從て增加し外廻りの柱に於て最大となるものであるから、例へば同一の荷重を負ふ同一の梁間の架構の連續がある時この增加壓力を精密に計算するなら

ば柱は建物の中心に於て最小で外方に向て次第に大きく外廻りに於て最大となつて來る。

勿論地震動は左右均しく振れるものであるから建築物の架構も左右對稱になる筈である。

次に考ふ可きは剪力である。この剪力は應壓力又は應張力を合して對角線壓力、或は對角線張力となるものである。地震に振られた建築物に對角線龜裂が生ずるのはこの張力のためであり、水平龜裂は純剪力のためである。之に抗するためには筋違を入れたり方杖を用ひたり、或は壁の鐵筋を對角線の方向に配置したりして居るが、事務所建築、或は工場建築等の如く窓の多いものに於ては筋違を用ふる譯に行かぬから梁と柱の接合點に起る曲能率を算定して水平と重量の加構丈けにて充分之に抗し得る設計にしなくてはならぬ。

震度階

次に地震の震度と建造物破壞の程度を述べて見やう。普通地震と云ふのは人間が地上で感じ得る程度のもの、即加速度十七秒々粍のものから初つて加速度四千秒々粍の程度のものが最も激しい地震とされて居るのであつて、そう無理に大きな地震はないものである。

地震の強さの程度の分類は各專門家に依て異るもので、又地震學に於けるものと、建築學に於けるものとも異るが、次に掲げたものは地震の強さと建造物破壞の程度の信賴す可きもの丶一つである之は大森博士が、震災豫防調査會に報告せる絶對震度階に依るものである、今同報告を全部此處に摘記するの煩を避けて主として建築物に關係あるもの丈け掲げて見ると、

一、地震動(水平動以下同じ)が最大加速度三百秒々粍に達する時は粗末の煉瓦壁には小龜裂を生じた土藏の壁は少し震り落され木造家屋は頗る振り搖がされて音響を發し、非常に缺點のある煙突には破損するものがある。

二、地震の最大加速度凡そ九百秒々粍に達すれば屋壁に裂罅を生ずるに至り、木造の古屋は少しく其の垂直より外れて傾斜を呈するものがあるが全潰するに至るものはない。

三、最大加速度が千二百秒々粍に達すれば煉瓦煙突の破壊されるもの其全數の四分の一に及び構造の粗惡なる煉瓦造の家は半潰、或は全潰するものもある、通常注意して造た煉瓦家屋の損害は壁に少し裂罅を生ずる位に止まる腐朽した木造家屋及納屋の類は全潰したい、弱き木橋は少し損害を受けることもある、基石及石燈籠には倒れるものもある、障子紙は破られ、屋根瓦の攪亂されることもある。又稀には岩塊の山腹から落下することもある

四、最大加速度二千秒々粍に達すれば製造所の煉瓦煙突は悉皆破壊され、通常の煉瓦家屋は半潰又は全潰となるもの多く、木造家屋の中の幾分は全潰となり、其他の場合にも雨戸障子は大低敷居より脫出し、通常の石燈籠は倒される。

五、最大加速度二千五百秒々粍、或は二千六百秒々粍に達すれば通常の煉瓦家屋は皆非常の損害を蒙り、鐵道線路は少し屈曲され河岸には幅二尺位の地割を生じ、大低の井戸は異狀を呈す。

六、最大加速度四千秒々粍に達すれば寺院は大低全潰し木造家屋の全潰するもの其の全數の百分の五十乃至八十度にも及ぶことがある、堤防は殆ど片々に破壊され、田圃の中を通して作つた道路は非常の曲屈を受け、堅牢の鐵道橋も破壊され、木橋は半潰或は全潰され坐の好い墓石も皆倒れ、時としては幅數尺の地割から砂及水の噴出することがある。

七、最大加速度四千秒々粍より遙に大になると所々甚だしい山崩れを生じて山腹は殆ど全く赤赭となり、建築物は少數の木造家屋を除く外は皆全潰となり、之等の僅に全潰を免れた建物も其土臺石から一尺乃至三尺も移動することがある、又地面には著しい斷層や其他の地變を生ずるに至るであらう。

即破壊的地震は三百秒々粍より初て四千秒々粍位までが普通のものであつて、夫れ以上は震源地に接近して居る局部の地方に起るのみであることを

知るのである、次に以上の七階程の地震を既往の地震に比較して、その事實破壞程度を考へて見やう。

一、最大加速度三百秒々粍　凡そ、〇、三劃の震度

この程度の地震は我國には屢々起るものである。大正十一年四月二十六日午前十時十一分東京に感じた地震の際には丸ノ内ビルデイング、郵船ビルデイングの壁に裂罅を生じたり、又日本家屋の壁の落下したものが數ケ所あつたが、この時の地震動の最大加速度は東京帝大構内の不斷觀測所の報告に依ると、三百二十四秒々粍であつたから、丸ノ内附近では四百秒々粍位にはなつたものと思はれるが、其の時の被害顯著なるものを掲げて見ると、

丸ノ内ビルデイング、東京會舘、日本郵船株式會社、本所電話交換局、末廣座、愛宕上觀望台上智大學。其他木造家屋土藏、煙突等の罅裂を生じたものや壁の崩落したものがあつた。

だから最大加速度が三百から四百秒々粍位になると耐震的計算をしてない、高層建築や古い木造家屋施工の悪い煉瓦造等は輕微の被害を蒙るものであることは明である。

二、最大加速度九百秒々粍　（凡そ重力の一割の震度）

今村博士の發表に依ると、先年九月一日の地震で東京本郷に於ける震度の強さは重力の凡そ十一分の一を示めして居るそうであるから、丁度この階程の震度に相當する譯である、大學構内に於ては煉瓦造は大低裂罅を生じて居るが、殊に工學部本舘は内外とも使用に堪へぬ程破損して居つた。

三、最大加速度千二百秒々粍　（凡そ重力の．割二分位の震度）

今度の地震について考へて見ると山の手邊の震度に相當する階度のものである、青山邊でも古い土藏家屋の外部壁が剝落して裸にされたものや、大谷石を積み上げた、相當に立派な石造家屋の著しく破壞されて居るものを見受けた、又青山墓地を視察した時には、聯隊の方の崖の上にあるものは大半倒れて居た。

四、最大加速度二千秒々粍　（凡そ重力の二割強

の震度）

此の度の地震で云ふと芝區、京橋區、日本橋、神田區邊の震度に相當する見當である。

五、最大加速度二千五百秒々粍（凡そ重力の二割五分の震度）

此度の地震で云ふと本所深川區邊の比較的弱かつた所の震度に相當する。

六、最大加速度四千秒々粍（凡そ重力の四割の震度）

横濱附近ではこの位の粍度の震度であつたといふことである。

七、最大加速度四千秒々粍以上（凡そ重力の四割以上の震度）

震源地に非常に接近して居る所では四割以上の地震が來るものと豫期しなくてはならぬ、此度の地震でも鎌倉邊や、小田原邊、箱根邊になると四割以上の地震であつたことは事實らしい。

我家は花より古るし

馬も無事

建築藝術に於ける歴史の問題（三）

山崎萬壽夫

承前表現主義思想に就ては、川村氏論文『表現主義と其根本思想の建築界に及ぼす影響』（本誌第六輯貳號）の參照を望み、當然破綻すべき運命にある資本主義的建築に論及しやう。

大略前號に明らかにしたと思はれる資本主義制度に於ける現代の社會は、正しく偏局せる文化の病的現象を呈してゐるのである。目前の社會的組織は漸く第四階級の勃興と共に崩壞し盡くされむとし、而も未だ新らしき社會的組織の確立もなく社會人心は方向を失つて動搖のまゝにある狀態にある。而して個人的にも社會的にも精神的分裂崩壞を生起する最も根本的な原因或は條件となつてゐるものと云へば、それは經濟的關係の大變動人口の大なる增加及び一般の社會的關係の擴大複雜になつたことである。此等の社會的事情よりして種々なる新しい事實が現はれ人心に無類の新しい刺戟印象を與へるに至つて、竟に人々の神經興奮の狀態を導き神經衰弱的社會を誘導したのである故に一般に彼等は必然的に暗示感性が異常な强度を示して、與へられた刺戟に對しては何の批判及び反省をも加へず無條件に受け入れるのであるから、續々として與へられる新らしい刺戟と暗示感性との間には自然に連絡が生じて、茲に『新らしさ』を求める摸倣行爲が生じ、人々は何にても新らしいものでさへあれば喜んで受けいれ、同時に切に新らしいものを要求し憧憬するやうになつたのである。また一面に於ては、創始性發明性の大活動を導いて續々と新らしいものが現はれ、新らしい思想感情企業が成立して其創作及び摸倣に凡てを忘却せしめたのである。

併し、現代文明に於て最も重大なる根本的一特性と認めらるゝものは自然科學の發達である。假

今それが資本主義制度より生れ出たものではなくとも、此偉大なる發達が實に資本主義制度の下に於て成されたのであり、同時に資本主義のかゝる大發展が自然科學の發達によるのであつて、相互に不可分離的な關係を有してゐたことである。斯くて其高潮に達せむとし非常な偉力を得た自然科學は、自らの限界を超えて其因果律的必然を人格價値にまで及ぼさんとし、而も資本主義制度の社會に至つては前述に於けるが如き不當なる人格評價を行つて恥ぢないのである。從つて資本の大と多量生產を目的とする資本家階級にあつては、彼等が現代社會を組織する階級であると自ら誇負するに始まる虛榮心の發現——誇示によつて、量的の大を求め價格の大を惜まずより新らしさの追及に切なるあまり、竟に全體なる美的價値を離れた高價なる流行の建築を導き出したのである。彼等が要求する建築は即ち外觀華麗なる建築、着飾つた建築であり生活なき建築である。彼等は其の大いさに於て其の經費の高價なるに於て、對社會的の誇示を滿足するべく計畫を建築家に依賴し、建築家は其依賴者の滿足を期して、其の建築と依賴者を媒介として自己を保存し主張しやうと企てたのである。故に斯かる建築は、一面經濟的に大なる建築であり一面虛榮と虛言阿諛の建築と言へるのである。勿論その量的大に伴ふ構造上の計算に至つては實に自然科學の發達による賜として感謝すべきであるけれども、吾人は歷史の使命を忘れて建築の價値を論じてはならないと考へる。建築は自由に其の時代の社會生活を反映する一全體であるが故に美の生活があり文化の尺度となつて歷史に統一されるべきものである。

時間と云ふ觀念の下に新なる價値が創造されてゆく、換言してより高き價値の創造は常にある目的(Zweck)を豫想するものである。言ふまでもなく人間に於ける生命の維持より一切の經濟的活動が是を目的として始まつたのである。從つて此の生存の過程よりより高い文化價値に到達せんとする努力は、凡て經濟的下建築を基礎として行はれるのが當然である。然るに其の下建築(Unterbau)であり基礎的條件であるべき經濟的制限が、現代

資本家階級に於て最高位を獲得し、資本の大と營利の大を目的とすることから、其れ自身に於て目的をもつ建築は單なる彼等の企業の手段となり美的價値に貧しい資本主義建築——企業建築となつて唾棄すべき社會的存在の意義を保つてゐたのである。

建築は茲に到つてより低き文化價値に認められるに過ぎない哀れな姿を示したのである。常に繰返へすやうに、吾人は社會に生活するに當つては一の認識目的としてより高い文化價値を認めてゐなければならない。只本能的衝動的に自己の階級のためにのみ行動する現代資本家階級は『物質的生活の生産方法は一般に社會的政治的及び精神的の生活過程を條件づける』と云つたマルクスの言葉の眞理を知らず、且つ亦人類發展の歷史が生産手段の如何によつて自然科學的因果律によつてのみ形成されるのでなく文化價値を實現しやうとする目的論的考察によつて觀察され、又是によつて經濟的發展も精神的發展も是正され得ることを默殺するか、或はそれを否定して自己階級の保存を完ふしやうとするのである。

大略以上述べたるが如き心理をもつ資本主義制度の支配下にある現代の多數建築家は、當然その他の階級の自覺によつて面目を一新せる建築を生むべき建築家の自由な活躍の餘地を與えなければならないのである。

第四階級の建築は勃興せらるべきであり、より高い價値の創造である。

吾人は現在に於ける經濟生活を理解し自然科學的研究の限界を認め、其利用的性質を充分に發揮せしめて、より高い價値の統一——文化の發展に志してこそ現代人としての生活を意義あらしめるのである。素よりそれは凡ての個人の自覺を必要として始めて行はれるべきものである。吾人は相對的知識の分化發展の方向に向ふと同時に、その分化發展しゆく知識を反省し其根元を尋ねむとする反對の方向にも向はねばならないのである。要するに、是等の知識はをくの欲望を滿足せしむべき手段に關するものであつて利用的のものであるが故に、欲望とは無關係に物を其自身に於て見る

絶對的知識を俟つて始めて統一の純を得るのである。絶對的知識とは宗教の立場にあつて、物を見て得る處の知識、藝術を成す直觀の如きものであつて純粹認識であり利用的でない處のものである即ち其の特殊性を看取しても、何等彼を利用するに役に立たぬ只是に與つて活き是を樂しみ觀るに過ぎぬものである。前者は其の反省によつて一切の意識の根元に徹することによつて理性界へ還り有限的意識を脫して純粹意識界に還歸するのである。故に此の立場なき立場にあつては、凡てが在るのではなくて創造されるのであり、卽ち全であり美である。物を全くし物を生かす此の立場は物の魂と一となる唯一の立場である。すべて魂は美なるものであつて完き生である。卽ち美は絶對的精神の現れと云ひ得るのである。

吾人が期待する第四階級の建築は、斯かる意味の魂の建築であることを望むのである。

其れは構造其儘の美であり、實用そのものに見る美でなければならないと考へるのである。もとより建築家は藝術家である。彼は其の精進努力せる魂をもつて現實に立てらるべき彼の建築物を、現實の外にある美の建築としなければならないのである。前述せる處の表現主義思想は適切に此の魂の美を讃へ、眞を求めて直徹に進みつゝあると觀ぜられる。彼等の聲は單に己が主義の下に與奮し凡てを統一せんとする慾望の叫びではなくして眞を求めんとして叫ぶ人間の聲である。文化價値を建設してゆかうとする眞の人間の努力なのである。究極の眞は斯かる努力の前に次第に明らかにならうとするのである。しかし眞の表現は複雜多樣を極めてゐる。科學は普遍を求めて眞にゆかむとし、藝術は個別に求めて眞を摑まうとする。素より眞は眞たることに於て常に一である。

吾人は『吾等に殘されたるものは吾等が有とするに努め』是を後代に傳へて其の有とするに努力する。其處に歷史の生命があり人生の悠久がある。

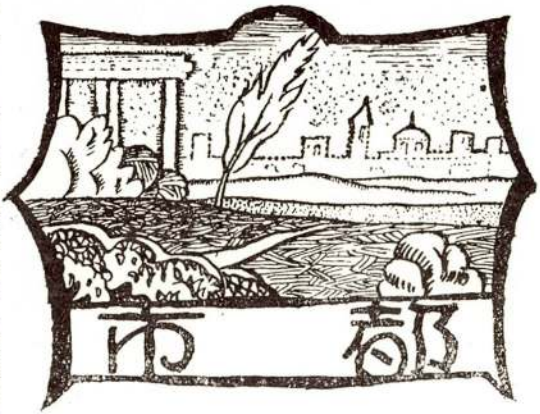
吾人の前途には星の光燦として輝き、吾人はその榮光に憧れて進むでゆく。イデー Sollen の目標は行手に嚴然として吾人は常に現實を思ひ Sein を顧つゝ男々しく人類最終の目的に向はねばならな

いのである。

『二つの天眞（ディヴィニチー）は互に相呼應すとアドラーが言へる其天眞は個性を指してをるが、此個性は個人的個性に限られず又國民的個性にも及ぶと見るべきである。彼の獨特性に勵まされて我の獨特性を發揮し、彼の文化を敬愛して我が文化の本領を失墜せざるが即ち彼我相提携して世界史に貢獻する方法である。而して藝術自身も文化の一内容として結局此歷史に屬するものであり、藝術家自身も其藝術家たるに於て道德的統一内にあることを示す是絶對的理性には善美一であると云ふ意とは別意義に於て世界史的精神には善美一に合するの意である。』

以上を以て私は此項を終らうとするのでありますが、是等の問題は尙ほ一層考究せらるべきものであり又誤謬も少くないと思ひます。しかし此文は多くの先人の跡を辿つて漸く私が考へたものでありますから、參考とした恩惠ある先人の著書等は一々擧げやうかと思ひましたが都合で見合せ茲に篤く感謝します。（完）

梅の村
白砂彩る參の畝



理想都市への過程

稲津圭三

正しい意味での都市は、今更ららしくしては申しあげるまでもなく、秩序なく整調なき雑多な建築の群叢でのみある筈がありませぬ。混錯したる建築の馴練もなき團隊的集合が、一見直ちに將來さるべき優れたる理想都市と呼ばれてはならないものです。單なる建築叢の雑色亂配は疑ふまでもなく、都市をその救ふことの能きない困亂曲歪のうちへまで驅けやるでありませう。今茲に記いてみやうと想ひますのは建築叢としての都市に就いてではなく、建築叢ではない意味での理想都市に就いてであります。

古いことは姑く措くとしましても、現代は何と言つても、近代文化の未だ充分にその自由なる開發を遂げきつてゐない不安不定な過渡期なのでありますが、同じやうに、過渡期の現代の都市も畢竟單に理想都市への過程でありまして、眞の意味での正しき理想都市とは別個のものでしかありませぬ。言ふまでもなく、單に物質的に豐富に裝はれたる都市のみが眞に都市として發達した理想都市であるとは申すことが能きませぬ。物質の集散のみが、金融機關の發達のみが、都市の目指すべき唯一の目標であつてはなりませぬ。言葉を代えれば、所謂商工業の發達のみが、都市の發達の謂ではない筈であります。何故なら、眞に私達の衷心を充分滿足させて呉れるやうな優れたる文化が決して、單なる所謂商工業の發達にのみよつて、

必ず充分に將來さるべきものだとは決つてゐないからであります。曾てウキリアム　モリスは、昔商工業の中心などと誇つてゐた都市は、元來唯賭博場に過ぎなかつたのだと指示し、その廣い都市の大部分が所謂貧民窟で、その貧民窟は全るて罪もない過多な人々の激しい苦惱悶患の干し場で、生んでは嬲り殺し又生んでは又嬲り殺しの人間の芥棄場で、それを日常あり來たりの生活として少しもあやしまない程墮落を極めてゐたと極言してをります。都市は近代人の蒼い墳墓であるとの言葉までありますが、かうした畸形的な都市の發達は、決して、私達の文化を優れたる眞の文化へ導き生長させるに役立つものではありませぬ。不潔不快な大工場と肉と墮落との賭博場との周圍は、快活さを失ひ微笑を忘れた所謂貧民階級のあまりにも騷々しく動物的に群集する場所で都市がある時、それをウキリアム、モリスに指示されるまでもなく、私達は近代都市を唯熱意もなく侮蔑し嫌惡するより外に仕方がなくなります。生活を恐威され心情を虐壓され、果ては生命をも信仰をも無下に藁のやうに踏みつけられ棄て去られる場所が私達の文化の誕生地であるとすれば、私達はかゝる文化へのむしろ冷たい異邦人となり異端者となり果てることを希ふやうになるでありませう。かうした苦しい暗らい密集的な生活場裡のみが、すぐ都市であると呼ばれてはならないのは申すまでもありませぬ。單に過多な人間や物質や動物や機關の積重ねが都市ではありませぬ都市とは歪められた文化の單なる亂れた集團の謂ではない筈です都市は文化の廢園でもありませぬ。文化の花園ならざる都市が、字義通りに優れたる、理想都市とはなり得ませぬ。

先づ廣い庭園を、次いで都市を來らしめよ、とは時に理解ある優れたる都市計畫者に依つて主張される正しき都市計畫の理想であります。あまりにも粗野で露骨に物質と所謂科學と亂積された都市は、必ず、都市としての明るさや快さを空しく失つてしまふでありませう。或る一家族の住宅がその一家族の選ばれたる家庭であるべきものであるとすれば、或る一つの都市もその都市人の選ば

れたる家庭であらなければならない筈であります枯れて荒れつくし、冷たく固くなつた家庭は、情も文化も藝術も優れて健やかに芽生えやう筈はありませぬ。冷たく枯れたものが伸びやかに生長するものでもありませぬ。文化に祝福されたる都市とは、時には誤解さをるやうに、單なる生命なき冷たい科學と利便との具象の謂のみではないでありませう。例へば街頭の問題にしましても、唯に殺風景に幅廣い大街路が單に利便をのみ唯一の規律として敷設されたものである時、多分、その街路は單なる商店街或は工業區としましても、決して、想像するやうに充分都市として美しくもなく住み心地よくもないでありませう。色彩は裝飾美の七割を占めるとまで定義されてありますが、些の色彩もなく綾もない石塊と金屬との手觸りのわるい配置の中に、私達が居心地よく樂しんで滿足のうちに生活することの能きないのはこゝに今更らゝしくとり立てゝ言ふまでもないことです。花園は石塊や金屬のみでできあがつてはをりませぬ花園でもなく、又或は花園をも有たない都市が私達を充分自由に育てゝくれる筈はありませぬ。そこには、都市としての靜かで落ちついた感じを外廓線のうちに、細心に整理されたる清潔なる歩き心地よき舖道、プラタナス、ニセアカシア等の明るく快揚な街路樹、澱むともなく流れるともなく靜かに搖れる流れを掩うて散在する美しき橋梁、注意深く選ばれて適當に配置されたる綠地、公園廣場等、尚其上に、意味深く興趣豊かに配在されたる優れたる彫塑、立像、噴泉、公共記念物等が必ず、充分に要求されなければならないでありませう。唯單に建物をもつて密に或は煩しいまでに掩はれたる土地のみを、優れて高い都市と呼んではなりませぬ。都市の誤算のない効用は、私達がその都市に於いて、如何に能率的に充分樂しく働作し得、如何に文化的に厭くまで快く生活し得るかと言ふ點にのみあるべきでありませう。言葉を代えれば、如何に私達が私達の情意の全てを正しき意味での人間的に生かし生長させることが、この都市に於いて可能であるかといふ點であります

而も、外觀のみ典型的な理想都市が、うまく內

面的にも理想都市であり得ることは、充分難しい問題とされなければなりませぬ。周壁二十里に足りた廣汎なるバビロンの大都市、全表ことごとく磨いた大理石にて裝はれた華麗なるアテネの美都市、或は王侯と奴隷と偶像とのみに溢れたる古代エヂプトの都市の如きものが、何時までも私達の都市計畫の理想であるとしましても當然不可でしかないでありませう。文化は日夜に厭くことなく複合へ混沌へと激しく流動して休みませぬ。時代と世紀との不斷の推移に從つて、都市も自らその當然の推移を續ける筈です。理由もなく他世紀を侮蔑し、或は無下に現世紀を嫌惡する要はないのではありますが、今日には今日の文化の樣式が與へられなければなりませぬ。私達の希求する都市は今日の都市であつて、昨日の都市では決してありませぬ。驕慢頽廢墮腐しつくした不具文化を高く誇示し乍ら、一朝にして暴帝ネロの狂火に炎滅し去つたロオマの都市が、私達の都市であつてはなりませぬ。建築の賢き配置は、言ふまでもなく都市を美しく規約づけるものではありますが、都市が、單なる雜多な建築そのまゝ集合であり總和でのみある筈がありませぬ。都市は唯所謂商品の取引所でのみないやうに、又建築の陳列所でのみないのは明らかであります。工場、住宅、事務室、バアトメント、ストア等、等、等、これらがそのまゝ果して完全なる都市を構成するでありませうか。美しき總和は美しき個の綜合であつて、醜き個は、勿論、醜き總和としかなり得ないものです。都市美は、或る點まで、建築美の飽和されたる總量ではありますが、都市を都市として眞に生かし得るものは建築の總和ではなく、かへつてその個であります。個の美は總體の美であり得ます。建築の外庭內園等の美しさが、やがて適度に均等飽合されて、素晴らしい建築叢の美を生みます。而も、今こゝに言ふ側の美しさとは、決して大理石で構成され金色と紅とを以つて色どられた所謂美々しい劇場のやうな建築をの美しさを指してのみ言ふのではありませぬ。一見簡素で粗野にできあがつた鐵筋コンクリイト構造の一事務所に就いてでも同樣であります。殊更らゝしく注意

するまでもなく、鐵筋コンクリートが未だ充分なる美の價値を有たないものとすれば、この發達は未だ充分とは言ひ難く、實利と美とが相叛逆し合ふものである時、その實別もその美と同樣大きい價値を有つことは能きないでありませうが、こゝに私の言はうとするのは、理想都市とは、決して所謂建築叢のみの謂ではなく、その建築叢を構成する建築も、又決して、外面の美しさのみに終始するものであつてはならないといふ意味です。外面のみの理想都市が、そのまゝ、内面的にも理想都市であり得るとは即座に斷言し去ることが能きかねます。

今最後に殘されたる問題は、内面的にも完成されたる眞の意味での理想都市が、如何なる表現樣式を採り、又如何なる文化的意義を有つかの問題であります。都市の建築としての從來の木造の不備不滿足は、他に幾多の議論があり得るとしましても、最近益々明らかにされましたため、言ふまでもなく、今日及び明日の都市建築は、全て鐵筋コンクリイト構造或は鐵筋コンクリイト、ブロツク構造へと躊躇なく改進されてゆくべきでありませう。保安を保證されない建築は私達の安住の圍繞とはなり得ませぬ。街頭の交通狀態に就きましても、不安で煩はしい架空線の如きものは實利と美觀の西方面より見ましても一切地下深く埋沒させ、地下には細心に施設されたる堅牢なる構造を有する地下鐵道を完成させ地上には街路樹歩道車道安全地帶等の充分完備されたる幅廣く歩き心地よき街路が完成さるべきでありませう。夕暮、親しき者と他意なく談笑し乍ら思ひのまゝに散歩し得るやうな舖道の一筋をも有たないと言ふことは都市人にとつては確かに滿足さるべき狀態ではないでありませう。美觀地帶としての公會堂、音樂堂、劇場、ホテル、宮殿、敎會、神社等の美しき布置、或は安全地帶としての公園、綠地、廣場等の意義深き配置等も、都市人の元分滿足さるべきまでに要求さるべきが至當でありませう。煤煙に汚れ塵埃に塗れたる不自然なる密集生活が、都市生活の避け得べからざる狀態として、何時までも大目に許容きるべきものではありませぬ。不健康

地が、都市の別名である間は決して都市は都市としての眞の繁榮と矜持とを有つことが能きないでありませう。些のうるほひもない都市が、どんなに焦心しましても、正しく健全なる文化を育み生長させることの能きる筈はありませぬ。個人の生活所謂文化生活であるためには、その生活が文化によつて豊かにうるほされてゐなければなりませぬ。都市が眞に近代の文化都市であるためには、その都市が充分文化に融和され文化に浸潤されたものであらなければならない筈です。不具な淺い文化は結局薄つぺらで氣障な所謂文化人を育てるでありませう。歪んだ非眞の文化は畢竟墮腐したけばけばしい文化都市をのみ構創するでありませう。安易に言へば、理想都市の本質的な價値如何は、そこに飽合された文化の價値如何言葉を代えれば、その文化の實質の非眞如何に依つて決定されます。正しく言へば、都市が文化の母胎ではなく、文化が都市の活體であるべきであります。都市は自ら動かず、文化がこそその都市を意のまゝに自由にします。ロオマの文化の隆盛がロオマの大都市を創成しました。ロオマの文化墮腐がロオマの大都市を廢滅させました。文化の消長如何は疑ふまでもなく、今日に於いても都市の一切の消長は最も親しい交渉を有つであります。

故に、理想都市への過程は、すぐ、理想文化への過程であると言ふことが能きます。理想文化への憧憬と熱意と信仰とを有たない都市が、理想都市としての大完成の日に遭遇することは能きないでありませう。美しき建築の素晴らしい建築叢のみが、決して理想都市の總量ではありませぬ。建築叢の外圍を如何にして都市らしく裝ふべきかゞ決して、唯一の都市計畫の目標ではないでありませう。文化は内庭にかくれてをります。先づ、都市の文化をその都市の内蔭に於いて充分健やかに生長させなければならないでありませう。從つて健全にして正しく育まれたる文化を都市の内蔭に建てることに依つてのみ、所謂都市は私達の目前へ招來され得るでありませう。内容に於いて充分一杯に充たされたる都市をこそ、私達は理想都市と呼びたいのであります。

震災と都市問題雜觀（三）

楠原祖一郎

公園の問題

1　市民生活を潤はしむるものは何か

日本の所謂都市通は、都市生活と云ふものは無味にして、且つ乾燥なものだと喞ちますが、それは私から見ると、どうも誤つた考へを持つてゐる人が云つた言葉だとしか思へませぬ。成程、日本の都市の樣に、都市計畫も出來て居らず、出來て居つても半成品であつては何んにもならず、歐米の諸都市の樣に、市民生活の文化的向上に必要なる諸施設が、今の日本の諸都市では完全に出來て居りませぬから、無味乾燥になり易いのは事實であります。而しそれを以て都市生活はドライだと結論するのは、些か輕卒ではあるまいかと考へます。都市と云ふものは僅づか市民生活の向上の爲めに、凡べての施設をして行かねばならぬものでありますから、決して公園の一つもない、音樂堂の一つもない、又娯樂機關のない都市と云ふものは、如何に日本の都市はブーアであつても、どこにもありませぬ。都市の經營者たる市長は、常に市民の文化生活と云ふものを考へて居るものです。

そこで都市の文化要素が充實されるとなると、都市生活はドライどころではない。極めて豐潤な生活、美しい靑空の下に、綠の森のこんもりと茂つた中に、白い美しい建物が、チラホラ見える實際畫に書いた樣な、そうした所に住み得るのですから、極めて都市生活と云ふものは憧れのものとなります。

而しそうした、豐潤さを吾々の生活に與へるものは何んでありましようか？それはやはり公園で

なければなりませぬ。

あのロンドンのハイドパークを御覽なさい。パリーのコンコルドの廣場やアレキサンダーミセ橋畔のこんもり茂つた並木道はどうですか。あれを見ても、都市生活はドライなものだと云へましようか。而かもロンドンは煙の都、霧の都で如何に宏莊な建物でも、煤ぼつて見へて氣持の惡いものだそうです。それでもハイドパークを見て、この森の中に吸ひこまれた場合には別世界へ來た樣で別に不愉快な氣持も起らぬ樣うです。パリーは唯れが想像しても清明な町です。巴里の放射路線の中心となつてゐる、大統領公館前のシャンゼリゼーの廣道等、其の眞只中に起立して、ヂットしてゐると、餘りの美しさに、自分の足が雲にでも乘つてゐる樣うに思ふそうですが、是等は皆都市生活に潤を與へるに充分なものです。

これを以つてしても、都市計畫の完成した都市ては、其の市民生活と云ふものは、決してドライなものでも何んでもありませぬ。ドライだと云ふのは、ドライならしめざる樣うに、都市を經營する其の市の市長なり、市民がやらないからです。

市民生活に潤を與へるものは何か？と云へば、それは實に、公園だと云ひ切る事が出來ます。

一にも公園二にも公園です。先づ公園を設けて後、其他の文化施設は講せらるべきもので、何を措いても其後公園を擴張するか、新設するかせなければなりませぬ。

2　大阪の公園と東京の公園

今大阪の公園と、東京の公園と比較して見ましよう。大阪の公園の面積の總坪數は十一萬餘坪でありまして、是れを分類すると次の如くなります

東　區

清水谷小公園	九〇〇坪

西　區

西野田小公園	三〇〇坪
阿波座小公園	六〇〇坪
西九條小公園	二、一〇〇坪
市立運動場	一一、五九〇坪
九條小公園	九〇〇坪

築港遊園　五、〇〇〇坪

南區

天王寺公園　四九、八〇〇坪
御藏跡小公園　三〇〇坪
新世界街園　三八六坪
木津小公園　六〇〇坪
日本橋街園　二五〇坪

北區

淀川公園　一四、〇九六坪
中之島公園　二〇、四〇〇坪
北野小公園　三〇〇坪
扇町公園　四、〇五八坪
合計　一一一、五八〇坪

となります、是れを東京市に比較して見ますと東京市の公園の總面積は四十二萬八千九百三十二坪でありまして、大阪の總面積の約四倍に當つて居ります。其の公園の分有狀態は次の如くです。

麹町區

日比谷、麹町、清水谷、虎之門、千鳥ヶ淵

以上合計坪數、六八、五〇四坪

日本橋區

阪本町、蠣柄町、兩國橋、淺草橋、

以上合計坪數、三、四四三坪

京橋區

數寄屋橋公園、總坪數八一六坪

芝區

愛宕山、芝

以上合計總坪數、一五〇、八三一坪

赤阪區

八木公園　總坪數一、〇一七坪

小石川區

白山、江戸川

以上合計總坪數、五、六二一坪

本鄉區

湯島、お茶の水

以上合計總坪數、三、四〇五坪

下谷區

下谷公園、一六、四三二坪

淺草區

淺草、今戸、待乳山

以上合計總坪數、六七、〇五一坪

本所區

綠町、若宮

以上合計總坪數、八、四〇五坪

深川區

深川公園、一六、九五三坪

市內計總坪數、三四二、四六八坪

市外の部

合計總坪數、八六、四六四坪

市內外合計總坪數、四二八、九三二坪

となります。尙是れ以外に上野公園が十五萬坪以上の面積を有してゐるものもあります。又明治神宮青山の外苑も十萬坪以上もあります。即ち市營公園以外に、民有地の娛樂公園もありまして、大阪等の實際に於て六倍以上の公園面積を有して居ります。這ふ云ふ狀態でありますから、大阪等は公園等では東京の足許へも寄り附けませぬ。然るに今度の東京の震災はどうですかこれだけ大きな公園面積を有してゐる東京の市街は　あの通りの慘狀ではありませぬか。若し大阪にあの災害にあつたとすると實際思ひ半ばに過ぐるものがありましよう。

なんでも世界一を以つて誇りとする米國では、其の首府のワシントンでの公園の面積は、全市の人口に比較して、一人宛の平均坪數は一二、四坪になるそうですが、東京の樣うに、一人に半坪にもならない所を見ると、實際お話しになりますから、そこへ大阪等を持ちこんで比較論をする等は到底同日の談ではありませぬ。氣の毒さが通り越して哀れを催します。東京の大震災に鑑みて、大阪では公園設置又は擴張が問題になり出しましたが、遲いながらもそれに氣が附いたのは喜ぶべき事です。

3　一人にどれ程の公園面積が必要か

これは實際論でありますが、都市生活者に對しては、公園程慰安を與へる所はないのでありますが、然らば、一人宛の公園の面積はどれ程あればよろしいのでしようか？ワシントンでは一人宛の

坪數は一二坪であるからと云つて日本に於ても、左樣でなければならぬと云ふ譯ではありませぬ。彼是國情を異にし、從つて各人の社會生活と云ふものは、それ丈け異つてゐるのですから、米國の通りを主張するのは、日本に取つては無暴との譏りを免れますまいが、市民の保健衛生等の事から考へまして、少くとも一人の人口に對し二坪位の公園面積を與へなければ其の都市に眞に公園があると思はしむる事は出來ないでしよう。勿論都市の地價と云ふものは法外に高いものですから、其の個人所有の土地を買收して、大きな公園を造ると云ふ事は容易な事ではありませぬ。ですから、成るべく廣いのがよろしいが、實際必要に迫られざる廣さは、贅澤に過ぎますから、何事も實質本位に考へて、私等は最低二坪位が一人宛にあつて欲しいと思ひます。然し私がかう申すと、或ひは攻擊する人もありましよう。即ち廣きに失するとか、狹きに失するとか云つて。然し乍ら一人の面積を二坪と制限して廣いと云ふ人に向つては、私は馬鹿らしくて相手になりませぬ。それでは狹いと云ふ人に向つては、除々に擴張するより仕方がありますまいと答へるより仕方がありませぬ。實際一人二坪では一寸した遊戲でも。出來兼ねる位ですから。之を六つかしく申しますと、市民の公園利用狀態は、波狀形になつて居りまして、たとへば、十萬人の人口を有する都市に、公園が二十萬坪あるとします。然らば、實際の所十萬人の人が十萬人とも、一度に二十萬坪の公園に出て遊ぶものではありませぬ。だから、其の中三分の一しか公園に出掛けないとすると、公園は出てゐる人は其時だけは、一人に就いて六坪位の廣さを以つてゐる事になります。若し二分の一の人が、公園に出掛けるとすれば、一人の所有の廣さは四坪になりますから、常に一高一低で然かも波狀形になつて居るのであります。それですから一人二坪と限定しても其の實質機能は二倍にも三倍にも働くものですから　公園問題に注意する人は此の原則を常に頭の中に入れて置かねばなりませぬ。



關東方面震火災被害視察日誌【四】

小川安一郎

小田原町（其二）

一、此の町にて面白き現象を呈して、倒潰したる者は、同町正午を報ずる鐘樓があつた、是れは下九尺位の高さの四方轉びの石垣の上に、同じく四本柱で四方轉びの萩吹の『ステーブル』の堂である是が此の地震の爲め、石垣が崩れたる爲め、道路の方へ眞逆樣に、實に面白く屋根を下に足を上に立派に逆『トンボ』の形を成して落ちて居りながら、少しの破損もなく保たし居る事に就て幸ひ其の儘に放置しありし爲め、研究に甚だ便利を得たのである。

一、寫眞に示す通りで、夫れは一見して構造的である事は云はずも明かである。

各構造的仕口及組合箇所ば柄を打抜き横より堅木を打込み頰杖へ取付け、筋違の働を成しありし事等にて、甚だ完全なる構造的でありし事は立派

に證明が出來るのである。夫れ故に完全なる構造物は地盤さへ立派で完全に保持する丈の者であれば決して破潰せない事を明言する事を得ると信ず

一、小田原通商銀行

此の銀行は此の附近で見ざる鐵筋『コンクリート』『タイル』張の（一部出來）施行中の者であつた『コンクリート』及鐵筋等に就ては專門外の事であるから、說明はせないが仕事は相當の事は施してある樣に見受けられた。



箱根大平臺附近の住宅の慘狀

是れは一階でありながら、寫眞にて示す通り、非常の損害を蒙り、とても再建せざれば役に立たざる事は勿論である、勿論施行中の事なりし爲め其の破損の程度が甚だしかりし事は明なるも如何に此の地方の地震が烈しかりしを推察せらる。

尙ほ此の地震の烈しかりしを證するに今一つ寫眞にて示す如く、尤も輕き屋根の無殘の崩潰を見ても明である。

箱根越へ湯本附近

一、湯本附近に行くに從ひ、家屋の崩潰は少き樣で只山崩があつたので電車は埋められ、自働車は破潰せられし儘に、道路に放棄せられある爲め道路修繕人足の晝寢場或は小供の遊び所になつて是等の人々に幸ひを與へて居つた。

愈々天下の險なる箱根に差懸り、新街道は山崩の、通路破潰の爲め、通行不出來、又危險なる爲め新に裏の方へ狹き險しき道を開きて通行に便ならしめたり。

途中塔の澤、大平臺、等の慘狀甚だしく山崩の爲め全町埋づめられたる所を其の上より眺めつゝ二三寫眞を撮影しつゝ宮の下まで行き、一と休みを成し腹を作りて勇氣を出し小湧谷、强羅附近を見物しつゝ視察せり。

宮の下

一、宮の下にて木造洋舘張付煉瓦仕上の郵便局及

び宮の下ホテルの破損の甚だしきを見たのである
が大抵の張付瓦の木造洋館は必ず張付物は剝落さ
れて木摺及び柱及土臺を腐朽せしめて居るのであ
る。

一、是れは即ち腐朽して居るから、剝落するので
又是れ等の張ぼて物は必ず雨を目地及其の外より
吸込んで腐朽を早くせしむるので東京方面に不限



箱根舊街道三島方面下り路

各地にて甚だ多く見受けられたる事である、皆理
屈は同じで、かゝる建築は可成く廢する方が危險
がなくて宜しいのである、然し不得已時は大なる
注意を以て防水劑を使用し雨水の浸入せざる樣建
築べすしである(後出)

一、然し此の構造物は大抵は倒れずに助かり居る
のは皆各部に筋違を入れボールトを以て締付ある
爲めに、地盤や地形に異狀がなき以上安全に保た
し居るを見受けたのは注意すべき事と思ふ。

强羅附近

一、右に必適する例が、丁度强羅附近に亞米利加
風の住宅が壁の部分になる所は多くの筋違ひを入
れて半分は平地で半分は崖の所に建てられる爲め
地震に依り崖崩れ、其の家は平地と境の部分より
二つに割れて倒れたるも、普通の日本流の構造な
れば今迄檢分せし所に依れば目茶苦茶に破潰して
居る筈なるに、立派に其の構造を保ちつゝ殘り居
る所より見るに、只釘で打付けたる儘の少なる材
料の筋違なるも其儘現存し居る事を見る事を得た
るは大に筋違の功の今更申す迄もなきが偉大なる
事を證する事を得る。

一、其の他强羅行きの湯本からの登山電車道が多
額の費用を投じて完成したるのに見るも、無慘に
破潰せられ最早再起の見込みなき迄の大打擊を蒙

りたるを目撃するに付、氣の毒にも氣持好き感がしたのである。（寫眞參照）

人間は宜しく健脚で、此の樂園地に行く程氣持宜しく愉快である事を忘れてはならないのであると思ふ。

小涌谷

先年東京支店建築中に運動會として小涌谷の三河屋ホテルに投宿せし事ある爲め、一層記憶を呼起せり、同ホテルは震災に依り休業を成し大修繕を成しつゝありし者の如し。

夫れより芦の湯に行けば通路は破潰し又は落込み、湯の湧出する筒所もあり、又は黄色に化したる湯道を現し蒸氣を發散しつゝ流れる樣を見て實に恐ろしく危險を感じつゝ急ぎ通過して、芦の湖元箱根、箱根の町に急ぎたり。

一、其の間四方の山々は丁度虎の毛皮を見る如く山崩れの跡を現し、何となく面白き美觀を呈せるを見たり

元箱根、箱根町

一、元箱根の家屋は殆ど倒れ、箱根神社の石の鳥居は外方に其の儘の形にて倒れ地上に於て部分的に破潰して居れり。

一、箱根町に來りて一層甚だしく全町崩潰其の内箱根ホテル慘狀の實に無殘なり代表的倒潰家屋を撮影し御覽に供する爲め二三寫して歸れり。（寫眞參照）

同ホテルの如きは屋根は亞鉛引鐵板の瓦棒葺御殿造りなり

一、塔ケ島の箱根離宮も相當に損害受け居る樣に見受けらるも周圍の塀及石垣の殆ど倒潰せるを見るに過ぎず。

要するに芦の湖の沿岸なる爲め其の震動も甚だしかりしを想像せらる。

一、昔の有名な關所跡を想像して行を急ぎ、山中新田、笹原、三ツ谷の各村落を過ぎる頃には地震氣分は夢の如く消へ去り、只昔の五十三次時代の旅行の難儀をしみじみと味はされて足の痛みも充分に感せられ、立派なる新道路の工事を眺めつゝ昔の石疊道の石の上を踏締め々々、有島田村塚原

村の部落を過ぎて三島の町に着したのは午前の四時二十分過ぎであつた三島より電車に乗り沼津に出て先づ『ステーション』で下り列車の都合宜しき十時の列車に乗り込む事に定め都合五時間位の待合時間を得たる爲め宿に就き湯にて汗と油とを流し、足の疲勞を休め、夕食を取りし時は實に何年振りにか飯を食べた樣な感起りし事は、永年忘るゝ事は出來ない程であつた。

幸ひ私と意を同ふする練習艦副官海軍少佐三好七郎氏と同一の行動を取る事を得たるは何よりの仕合であつた、

同氏は此の震災火災の東京横濱方面に起るや、電命に依り、品川は上陸物資の給與に盡力せし人でありし爲め色々の他方面の話も聞きたれども、此處には是にて止めて結論として概感を述べ終りとせん。

一、同夜十時四十八分に沼津を發して、翌朝十四日八時〇二分に大阪着を成し本社現場に立寄つて昨夜着せられたる池田君に別れて以來の行動を話し歸宅した。非常に疲勞を成したとも是れで任務は終つたと思へば喜しい樣だが、果して是れが立派な報告であるや否や頗る恥かしき次第である。

只私は出張中及ぶ丈の時間と多くの實物と友人とに依り見分を強め私は私丈の努力を以て視察して歸りしと十三日に歸省の命令なりしも翌日々曜なる爲め、箱根を越へて自利利他の爲め見分を廣めて歸つて來た事丈は大に意を強くして居る次第である。

以上は私が視察日程に依りて視察したる旅行日誌であるが、其の間に尤も深く感じた事は土藏が如何に地震の爲めに無殘の最後を遂げたる事に就て私の感じを後に述べて見たいと思ふ。

一、夫れは殆んど世人が土藏は安全な者として、貴重の品々を仕舞置きたるに斗らざりき、此の土藏は殆ど地震の爲めに各所に龜裂を生じ、甚だしきは壁は落ち瓦は振り落されたる爲め、最後の襲撃の猛烈なる火災に依り、其の缺間より火勢侵入し大切なる又安全を期したる此の土藏は殆ど其の跡方もなく、燃へ盡せるなり、實に此の事より考ふれば若しも地震が無ければ、此の缺間を生せず

に、火勢を防ぐ事出來たるも如何にせん、地震後は必ず火災を起す事は歷史に於ても亦今度の災害に於ても明である事なればこの際宜しく吾々の建築に關係ある者は大に考慮研究すべき事であると思ふ。

私はこの點よりして是非共、鐵筋『コンクリート』又鐵筋『コンクリートブロック』構造を以て建築し其内部にコルク板の四吋位の者をセメントモルタルを以て周圍にはり付け、其の上を漆喰仕上とし又板仕上としたなれば大に其の二つながらの目的を達する事を得ると思ふ。

『コルク』は前にも申せし通り防熱防寒防濕の作用を充分具備する材料にして特に『セメント』『モルタル』との附着力實に強大なる者なり、右の理由に依り土藏は勿論、倉庫、金庫に是れを應用したならば、必ず其の目的を達する事を得るならん

勿論金庫の如きは前の構造の上今一度前の『コルク』の上に三吋位の『コンクリート』を打ち更に三吋位の『コルク』板を張り最後の仕上を成したならば防火に對する事は絶無なる事を證する事を得ると思ふ。

是れから考へて木造洋舘が壁の中に空隙がある爲め、前にも申せし通り、只今迄外部より濕氣を吸收したる者が天氣の爲めに水蒸氣となりて木部を腐朽せしむる事になり、この度の不結果を來たした事なれば、宜しくの部を大に改良する事が急務であると思ふ。

一、私は彼の北濱住宅の構造は尤も其の當を得た者と思ふと同時に其外部に經費の都合にも依るが、一吋位の『コルク』板を壁に胴縁を打ち付け夫れに釘付として空隙を生ぜざる樣に注意し、最後の『モルタル』仕上を成したなれば、木部の腐朽を防ぐと同時に防寒防熱の壁体を作る事を得る、故に是れを住宅



箱根町の住宅の慘狀

にも應用したならば又好結果を得る事は明である（是れは小生の實驗せし事なり）是れは參考として私の感じと實驗したる事を述べたる次第である

結　論



箱根ホテルの倒壞

この度の地震及火災が如何に關東方の人々に危害を及ぼしたる事は、私が申さずとも分明せし事であるが、吾々建築屋の立場からでも、素人からでも直接建築物が適切に關係する事であるから吾々は大なる覺悟を以て事に當らざるべからざる事は申す迄もなき事である、只今迄見分視察せし色々の建築物より見るに、或る程度迄は天災如何とも人力の及ばざる事ながら注意周到なる建造物は必ずこの難を免がれて居る樣である、偶には天祐で助かつて居る者もあるが、要するに信念を以て建てた建造であれば、地質の如何に依らず完全である事は確である、然し燃易き木造家屋の集團を持つて居る町家では安心は出來ないのである、如何に土藏でも筋違を入れ『ホール』とを以て締め付けたる家でも、地震には必ず火災が付き者であるから土藏も龜裂より火が入る樣な具合でこの度の東京横濱もこの燃へ易き木造家屋の集團さへなかつたならば斯くの如き慘な災害は決して起らなかつたと思ふ現に東京でも立派な不燃燒建築物が地震では何事も無きに燃へ易き木造集團家屋の爲め立腐らしの有樣を呈して居るのである。然し是れは補修をすれば立派に元形を保ちて使用することが出來ることから考ふれば、出來得べくんば以後は不燃燒建造物の集團で町を造らねばならぬことである、其の不燃燒建築物は又鐵筋コンクリートの信念をこめたる建築であらねばならぬことに歸着する樣である・然し果して是れが實行出來るや否や疑問であるがなれども可及的でも夫れに近き樣にしたきことである。

畫界に於ける新傾向（上）

春陽會審査員　齋藤與里

畫界に於ける新傾向――斯の題目に當嵌るか、どうか分らないが、今の新しい種々の繪がどう云ふ經路を取て生れて來て居るかと云ふ事に付て感想を述べて見たいと思ふ。

過去に於ける繪畫の歷史を覽ると、色々な形を取て變遷をして來て居るか、其の間に絶えず進歩をして居る、或時には非常に退歩的傾向を示すこともあるが、其の時に於てすらも、何等かの意味で、何處にか進歩の跡が見えるのである。

所が最近――と申しても、こゝ七八年以來のことであるが、新傾向を示すやうな繪畫が少しも現れて居ない、換言すると、今日まで色々の形を取つて進んで來た繪畫がバッタリと行詰つて居るやうに思はれる。

最近色々な繪畫が歐羅巴各地から輸入されて、殆ど向ふに居つて見ると同樣、或はそれより更にハッキリと歐羅巴に於ける畫界の傾向と其の大勢を日本に居つて見ることが出來るやうになつて居る、それも段々其の度合を增して、應接に遑が無い程、色々な繪を取換へ引換へ輸入して來るのでそれを御覽になつただけでも、畫界の大勢及び新傾向は既に皆樣に於て御承知のことと思はれる、それに說明を加へるのは、或は蛇足になるかも知れないが、專門家の我々が見た考を申上げることも、或は參考になるかと思ふて、聊か卑見を述べて見たいと思ふ。

繪畫の新傾向と申しても、本來から云ふと、繪畫其のものゝ新傾向でなく、畫家、藝術家の藝術に對する態度の新傾向と言つた方が却て繪畫の本流を說明することになりはすまいかと思ふのであるが、それでは餘り抽象的になるので、成べく現實日本に輸入されて居る所の色々な繪畫に付て具

體的にお話したいと思ふ。

其の繪畫の本流がどうして今行詰つて居るか、從來としても新傾向を示す前には必ず何かに突當つて、行詰りの狀態になるのであるが、目下の繪畫の行き詰り狀態は我々の觀察を以てすれば、歷史上未だ曾て無き行き詰り方をして居る、で、具體的に色々な傾向の繪に付てお話をする前に、先づ少しく其の感想を述べて置きたいと思ふ。

歐洲大戰を界として、以來色々な形式の繪畫が生れて來た、尤も未來派の如きは戰爭前に旣に伊太利に於て勃發した運動であるが、あれは一種の『イズム』の運動であつて、繪畫の本流とは餘り關係の無い、謂はゞ側流のやうなものであるから、眞の畫界全體の動きと云ふものは歐洲大戰後に始つて居るやうに思ふ。

で、其の後現れて、今具體的になつて居る色々な形式、流派も可なりあるが、要するに、將來如何に美術界が變つて行くものであるかと云ふ點に付ては、唯迷つて居るだけで、まだ本當の進路もハッキリ致さず、又如何に變つて行くかと云ふ豫測も今は出來ない始末である、それはどう云ふ所に原因して居るかと考へて見ると、今日の藝術家の生活狀態と云ふものが從來と非常に變つて來た從來の美術家は超社會的で、社會人として生活することは餘り問題でなかつた、社會と云ふものから離れて、極端に云へば、全然社會と云ふものに關係なしに生活する途があつた、それは對建時代に於ても、亦武斷政治の下に於ても、畫家と云ふものは何處かに超然とした生活路があつた、或は僧院に立籠るとか、又大名のお抱へになるとかを必ずしも惡い意味ではなく、美術家としての生活を續けて行くことが出來た、のみならず、さう云ふ畫家の生活狀態の中から、非常た優れた、立派な作品が生れて居つな云ふ事實も、歷史の明に物語る所である、尤もさう云ふ事情から所謂對間の如き美術家になつて、却て美術を墮落させたと云ふ例は、歐羅巴に於ても、日本に於ても澤山あるけれども、兎も角も社會の實生活と殆ど何等の關係なしに畫家の生きる途が昔はあつた、然るに近來資本主義制度なる者が最高潮に達して來たと云

やうな所から、畫家も今までの如く超然として、全く社會の實生活と關係なしに生活すると云ふことが絶對に容されなくなつて、畫家としての生活作用が今の社會組織と非常に密接な關係を有つやうになつて來た、そこでさう云ふ狀態の下に居つて、どうして將來自分達の藝術を押進めて行くことが出來るか、それがさう云ふ現在の社會狀態と平行して行つて、而も同時に藝術の內容を押進めて行くことが出來るものであれば、敢て差支ないのであるが、さう云ふ社會狀態と藝術の有つ內容が全然相反して居るにも拘らず、それと交涉を絶つことなしに、平行して、而も藝術の使命を全うして行かなければならぬと云ふ所から、美術家として、歐羅巴ばかりでなく日本に於ても、非常に苦痛な境地に陷らなければならぬと云ふ狀態に今在るのである。

所がさう云ふ狀態に置かれた我が美術界、殊に洋畫界の實際の有樣はどうであるかと云ふと、外面に於ては、日本の美術界は決して沈滯もせず、又窒息もせず、益々隆盛を極めて居る、けれども、それは決して繪畫が內容的に進んで居るのではなく、資本主義制度に阿附して、繪畫が商品化され同時に畫家が商人化されて來た結果、唯外觀に於て隆盛なる如く見えるだけで、眞に繪畫を研究し繪畫の使命を考へる立場から、此の狀態を見て、繪畫の隆盛を思ふ譯には行かない、そこで繪畫がどうなつても構はないと云ふのなら、作品商品化し、藝術家が商人化して行つても差支ないのであるが、それでは困る、それでは繪畫本來の使命が滅却されてしまふと云ふやうに、其面目は繪畫を考へて居る人々は、どうにかして此の狀態を切拔けて、其の使命を滿足に果したいと云ふ所に大なる煩悶があり、そこに今畫界の行き詰りがあるものと私は親察するのである、是は單り私自身の觀察ではない、歐羅巴に於ても、此の狀態から今後如何に繪畫が變遷して行くかと云ふことに付ては色々な議論が行はれて居る、けれども、今それを豫想することは必要でないと思ふから、申上げないが、兎に角新しい傾向の繪畫がどう云ふ所にあるかと云ふことを具體的にお話することはさう云

ふ事情に依て出來ない、同時に今現れて居る色々の形式を有つたものは決して新傾向でなく、可なり古いものであると云ふことをお斷りして、そして今輸入され、又既に日本に於て行はれて居る所の色々な畫風、傾向に付てお話したいと思ふ。

それもさう古い所からお話する必要も無し、又詳しいことは書物に讓つて、先づ十五世紀の末から、十六世紀にかけて起つた、あの伊太利の文藝復興（ルネサンス）期の繪畫から、其の後ぢう云ふ風に變遷して來て居るかと云ふことを大體三つに分けてお話しやうと思ふ。

何事でも一番古いものと、一番新しいものと、其中間のものと云ふ風に必ず三つに分かれ、其の各々に又色々な枝葉が分れて、種々樣々の形を呈して居るに過ぎないと思ふ、で、今其の一番古い所を假に古典藝術（是はもつと古い所に依ふのが普通であるが）として、自然派から、現代の印象主義と云ふ風に大體に三つに分けて考へることが出來ると思ふ。

一口に、文藝復興期の繪畫はどう云ふ所に特徵があるかと云へば、言ふまでもなく、伊太利の『ルネサンス』は希臘、羅馬の流れを汲んで、自然派に復興したとは云へ、それは矢張り形式を尊重すると云ふ所に終始して居つたやうに思ふ、細かく云へば、其の間にも『ヴェニス』派の色を重んじた色彩派とか色々な變遷はあらうが、兎に角形式としては形に重きを置き、內容としては宗教を主にした、信仰的の繪畫が特徵になつて居るやうに見える、而して繪畫と作者の關係に於ては非常に物を客觀的に取扱つた結果として、筆者の個性と云ふものは全然度外視された、從て其の時代に現れた繪畫を通覽すると、細かく見れば、色々な變化はあらうけれども、大體に於て異なる所が無い基督を畫けば、誰が畫いた基督も同じものであるマリヤを畫けば、誰が畫いた『マリヤ』も其の形其の描法は殆ど同じである、『ラッハエル』が畫いた『マドンナ』も、亦『アンゼリコ』が畫いた『マドンナ』も、其の『ポーズ』から、筆の運び方から、其の着物の模樣から全く同じものである、伊太利邊の美術館を御覽なつた方はお解りであらう、大

體に於て其の作品だけを見て、異なつた事に成つて居ると云ふことを觀取することが出來ない、それが今日我々が見て、尊敬すべきものではあるかも知れないが、少しの親しみも有つことの出來ない非常に物足りない繪畫であると思ふ原因であらうさう云ふ狀態で、唯形式に便り、其の內容が段々輕薄になつて來て、佛蘭西の十八世紀頃まで續いたが、あの有名な『クラシック』藝術を最高潮に築なき上げたと云はれる『アンクール』を最後として、此の『クラシック』藝術はバッタリと行き詰つてしまつた、其の時に現れたのが、佛蘭西の「ロマンテック」の元祖として有名な『ドラクロア』である、此の『アンクル』と『ドラクロア』が『クラシック』藝術と『ロマンティック』藝術を劃然と區別する標準にされて居る、それは要するに個性の自覺に出發したもので、從來の藝術が單に物語を畫き現して、繪畫其のものよりも、其の物語の有難さを觀衆に看得させると云ふやうな巧利的傾向にあつたのに反對して、繪畫と云ふものは、自主的に、即ち自分の個性と云ふものから生み出したものでなければ、眞の藝術的生命は無いと云ふやうな立場から、猛然として現れたのが『ドフクロア』であつた。

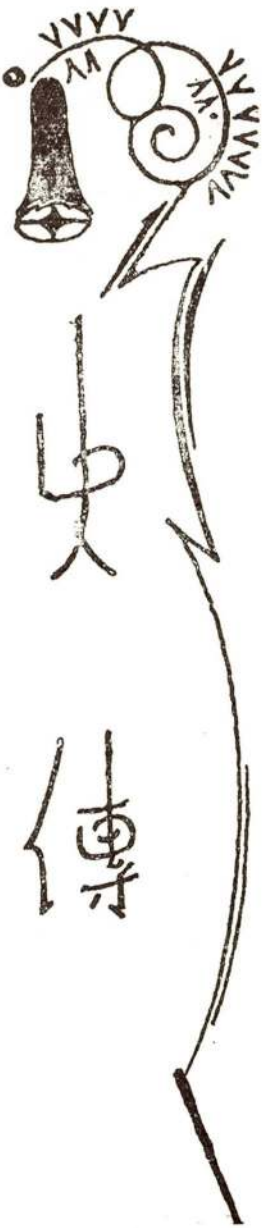
それを機會に、繪畫と云ふものは、必ず基督の像を描き、又『マドンナ』を畫き、『セーント』の物語を畫くものであると云ふやうな習慣から脫して全く自由な創造に向つて段々押進んで行つた結果そこで印象派と云ふものが生れて來たやうに思ふ其の間に『ミレー』『ゴロー』などゝ云ふ佛蘭西の所謂『バルビソン、スリール』なるものが挿つて、自然派の繪畫と云ふものがあつたが、要するにそれ等は印象派の畑に屬するものである。

此の印象派にも、『マーネ』『モーネ』『シスレー』と云ふやうな色々有名な人々が現れて來たのであるが、其の印象が餘りに印象と云ふものに捉はれ過ぎて、繪畫と云ふものは唯自分の印象を描けば可いと云ふやうな立場から、どう云ふ風に描けば自分の印象した美を十分に表現することが出來るかと云ふことに付て、彼の光學派、若くは點描派と云ふ如く、色彩にしても、之を化學的、光學的

に分析して、同じ赤い色を描いても、其の中に綠とか黃とか色々な色を入んて、自分の感じた色彩を畫き現さうと云ふことを企て、それを或程度まで實行し、又成功したのが所謂初期の印象派である。

所がそれは繪畫界に取て非常な發見であつたけれども、餘りに印象を尊重すると同時に一方に於て筆者の個性を閑却するやうになつて來た、即ち自然主義は如何にも自然の肖像を畫くと云ふ風に山なら山、川なら川を見て、自分の感じた通り、誰が見ても、五人なら五人、十人なら十人ながらさう感ずるやうな、客觀的自然を客觀的に、自分の感情と云ふものを度外視して、非常に冷淡に、暢氣に『カンバス』に寫すと云ふ結果、それは非常に力の無い弱々しいものになつて、印象派と云ふものの終局が起つたやうに思ふ、其の時に當つて現れたものが即ち非常に獨斷極端とまで云はれる位な後期印象派である。

汐跡の
海月ところけつ
畫霞



ジョン、ナッシュを憶ふ

曼荼羅社同人　池田谷久吉

偶々英國の歴史を繙くことも私達にとつては實に興味深き問題の一つである。殊に十八世紀の中葉に於ては凡ての方面に大なる革命があつた。

當時彼のスチューワード家は敢なくも斃れ、是迄の如く保守的な鎖國的な一切から離脱して閉された戸の後で嗽き、水壜の上で祝盃を擧げてゐたれも是等は最早や過去の物語りと失せて、産業革命の曉鐘は到るところに亂打され、かのランカシヤには新しき機械が起り、舊き順序は廢されて愈々更新へと蘇り、マドラスにはクライブが新境地を開拓し、加奈陀にはウヨールスがその權を把握してありとあらゆる部門には新鮮な空氣が溢り、戰爭、波瀾、變化極りなき一の轉換期（ターニングポイント）を畫してゐた。

此の時に當つて英國の建築界を代表し大いに活躍、雄飛したものゝ第一者こそ、これジョン、ナ

ッシュである。

彼の生ひ立ちに就てはゼームス、エロウフラシュの如く、實に秘密に初まつて秘密に終るといつた樣に極めて不分明である。

假定へば彼の出生はロンドンで生れたウエルス人であるとも傳へられ、また一說にはウエルスに生れたロンドン人であるとも傳へられ、その經歷に關してはあいまい至極である、是は取りも直さず彼は數寄な運命の爲めに生活の定住なく所々を轉々として流浪してゐたからである。

英京ロンドンの建築協會には塵埃のウズ高く積つた中から彼の半身線の雄姿が嚴然として出入の人を見下ろしてゐる。オックス、フォード大學にも彼の肖像が保存されてゐるが何れもに表はれた彼は常に歡喜に滿ち滿ちた、愛の濕ひにあふれた瞳と、充分の才能を持つた明晰の頭腦とがありと偲ぶことが出來る。

彼の社會に對する人間としての價値批評は各人によつて種々の異論を耳にしてゐるが私は何は兎もあれ、天才的表圖家であり、偉大なる建築家であつた事を推奬したいものである。

彼は生涯を建築の爲めに捧げ建築と共に運命を共にした、然し時間に於ては隨分長い間であつたが初めて建築に志した頃は人間としてはかなり年をとつた分別盛りの四十を過ぎてゐた、それ以來七十六の老年に至る迄繁忙な生活を續けてゐたのであつた。

彼の建築の先づ手初めの第一歩は州の監獄工事であつた、これは最初は田舍家を王宮にすべく着手しかけたが途中變更して監獄として使用されたもので何處にも邸宅の俤がひそんでゐる。

今一つ彼の作品として有名なリーヂエント街と公園とがあつたがこれ等も今はその跡を失せて惜しい事である。如何に偉大なる藝術家たりと雖も時を獨占し支配する權能の無力をしみ〳〵と思はせられる。

時の流れ、時の力には何者も抗し得べくもない今こそリーヂエント街は滅亡してゐるが彼の生命は不變である、不死である、今も尙躍如たる當時

の盛は豫想し得られるが、その實在し得ない現實には深刻な悲哀がひそ〳〵と蔭を忍ばせてゐる。

今のリーヂエント街が過ぎし往時の美しさを失つただけに一層彼れナッシュを憶ふ念を彌々深くする、またオデオン宮殿を垣間見るときにもその局部、局部に彼の苦心の跡が歴然とほの見えて氣品ある、崇高さには思はず尊敬の念が起つて來る。

彼のピカデリー、サーカヌば當時の外觀は哀れ見る影もなく改築され、今亦、オックス、フォード、サーカスも殆んど改築されんとしてゐる。

或は見方によつては小なるもの大なるものに改築され、漆喰塗は石造に改築された事は無論優秀な變化であり、相對的價値に於ても非常な增加であるとも云ひ得らるゝが、それは現代の耳隱髷や流行を追ふたスカートを穿いた洋裝美人を見る趣味と規を一にするもので、それは須く感情的のものであるまいかと思はれる。

然しこれ等の事は時代の一つの流れであり思潮のンシボルであるかも知れない。

現在のリーヂエント街が三十年後には如何なる影響　及ぼすだろうか、都市は一つの綜合藝術である事を私は力說したい、建築に道路に　河川に橋梁　其れ等の綜合美が始めて都市美を形式するものである。輕々しく都市の建築を左右してはならない、そこには偉大なる責任を感じなくてはならない。

ジョン、ナッシュの作品が今も尙、ロンドンの到るところにチラボラと殘存してゐる、この街から彼の一物も殘さず破壞し、改造するには少くとも今後五十年や百年では出來そうにもない、どうか一日も永くあのまゝであつてほしい事を希望する外には私の望みとしては他に何物もない。

今、ハイマーケット、シャターに殘る玄關は美しいものである。

彼の生命が宛然生々としてゐるまた彼の有像が今時代の力によつて愛してゐた作品をぞし〳〵と破壞されつゝある事は不知不識でユーモアに滿ちた面持ちで端然としてゐる。

彼がアイルランドに作つたキリモア城は八〇、〇〇〇磅を要した堂々たるものであるが一ヶ月程

以前に哀れにも一農夫によつて僅々一〇〇磅で賣買された、今若し彼がこの事を知つたならば、どんなに悲嘆する事だらう、だが私は信ずる、假定建物は破壞さるゝこともまた改築さるゝことも彼の作つた通(ストリート)や、公園(パーク)や、廣場(スクエヤー)は永久に存在するに相違ない、これ等に對しては少くとも感謝の念を捧げたい。

ナッシュは當に葬り去られんとするゴシック藝術の再燃に油を注いた、そしてセント、グビデ大會堂の西玄關を僧室とを設計した外、マガダレンに新しい庭を案出したがこれは實行されなかつたバッキンガム宮殿も彼によつて作られメエルの玄關も改造してゐる、まづこれ等は彼の代表的のものと云つても差支のないものである。

最近に到つてラーヤー、リーヂエント街は殆ど過半は破壞された、その昔、ドーランド、エイヂエントの事務所があつてナッシュの生れた當時は英國の領土であつた大國プレス、エイヂエンがあたためにその名を取つて呼んでゐた有名なもので果敢ない運命に消えて行く事は惜しい事である。

彼は永らく朝廷に仕へてゐた、そして彼の崇高な人格と麗容なる風采とは犯すべからざる威嚴を保つて然かも彼の建築した宮殿に王宮の賓客を接待する邊りはとても他の許さない獨自の境であつた、此の點に於てはたしかにルーベンスの樣な氣品があつた。

一步讓つて偉大なる藝術家(アーチスト)でない迄も偉大なる建築家(アーキテクト)であつた、彼は一大廻廊を作るに當つて四ケ年間の長い歲月をローマからわざ〳〵藝術家を招聘してラファエルの構圖を複寫に努めさせた事も彼の功績の一つである。

彼はその生活實に裕福であつたが決して驕傲でなく、謙遜にしてまた阿諛する所なく人に對してまた親切に、度量大きく深遠なる思慮を以つて事に當り一代の傑人であつた。

尙亦彼は到つて物質に淡薄にして巨萬の富決して門閥に讓らず之を公益に使途してゐた事も有名である。

強いて彼の缺點を擧げんとせば偶々感情の支配を受けた位の事で別段之とて非難すべきものでは

ない。

彼は建築以外に土木にもかなりの工事を施した事も特筆すべきである。

セント、ゼームス公園内に架けられた橋は或る一役の用に供する目的であつたが、かなり長い年月堅牢に維持されてゐたとの事である。

只一つ彼の爲めに惜しむべき事はワーテルロー戰爭の紀念碑であつた、人は誰に限らず一方に味方あれば一方にまた敵のあつた事は拒まれない事實で彼も人間であつた、朝廷の信望を擔つてゐた彼もかのワーテルローの紀念碑の設計が數多の設計案中の白眉でありながら或る反對者の爲めに實現されなかつた。彼は八十近く迄もかのセント、ゼームス公園を作る爲めに働いた、又ユナイテッド、サービース、クラブも竣功した。

然して自己の爲めには約四十年前に友人ユッカソールに誘はれて此の建築界に身を投ずる迄從事して來た田園生活を永らく打ち捨てゝ僅か死の數年前、之を享樂したに過ぎなかつた。

英國の建築界には彼以外に數多の巨相がある、イニゴ、ジョンズ。ウーレン、ヴンヴルフ。ロバート、アダム。ウイリアム、チャンバー等は或は彼れより優秀な大家であつたかも知れない。

然し今も尙、バルメルに沿ふて生命が動く限り或はリーヂエント街の長き道を橫切つてゐる池の水が渦卷く限り彼の名聲は大空に輝く明星の如く永遠にその光りを失はないだらう。

一九二四、二、二五、

社告

天沼博士の續埃及旅行記は本誌印刷に際し寫眞製版の間に合はざりし爲め餘儀無く休載しましたが、次號に揭載いたします。



漫錄

表徴の墳墓

——建築叙情篇（三）——

廣岡峰太郎

生より死へ、死より生へ、輪廻である。

北海の邊土、南山の麓にも、まざまざと輪廻の姿態を見る。之は墳墓である。奥津城である。

生命長く、恥多き身の、墳墓を思ふだに、潜越の沙汰ではあるが　生は睡眠なり、死は覺醒也』の、トルストイの言葉に、逢着して、肅然として人生象徴の墳墓を思ふ。

虻鳴けり墓場の隅の枯樹。

草深き墓場に咲ける紫苑かな。

春情秋意の、動く處はたゞに、生命あるもののみには限らない。

一塊の土饅頭の、蔭に咲く名も知らぬ草の花にさへ、塔婆に音もなく降りそゝぐ雨の音にさへ。

物皆自然の發露に他ならぬはなり。

おゝ、わが生命の死は、覺醒の搖籃よ。
この身は、この心は罪と、惱みに、傷心する者である。木の實もて、草の花もて、願はくば、この罪人の搖籃を飾るを許せ。
木香新しく、墨痕鮮やかなる墓標一基、圍むに野茨の柵、敷くにクロバ！の綠りは、將にゴブラン織の敷物、ブロンズ、金象嵌の匂欄にも、優ふべきである。心即ち足れば、ぺの魂瞑するであらう。
常住の世は、水の如しといふ。常住水上の噴墓よ。砂上に樓閣を夢見るは人の子。その子營むに水上噴墓を以てすゐは、その當を得しと云ふ可きであらう。
我等は、無常迅速、生々流轉の相を知る。我等全能の神ならずとも、我等の、心は叶ふ。
我等の悲願は、永劫の前を過ぎる、人生一瞬を刻む噴墓造營。
生を享けて、生を樂しみ、死に直面して、懼れざるは、勇者である。
我等の完成への道は、未來永劫に連なる。
命生ある限り、現實を愛するは、我等未來の上に甦る幸福を、祈る心に他ならぬことではないか
我等は、過去、現在、未來の上に、超然として生れ出る者である。我等還元の前に、敬虔なる、默禱を、捧げようではないか。
新生は、我等の噴墓より、曙光を齎すであらう曙の光は、わが足下の、草の葉に泌む。早春、山容の莊嚴さよ。
惟ふに、我等地の子噴墓は、透徹したる、各人生涯、象徵の噴墓であり度い。
萬金を、投ずるは、王侯、貴族業なれど、我等一介の賤民と雖も、人情動かすべからず、恆久噴墓を、惟ふ情は、たゞに神秘主義者のみには、限られないであらう。
現在をより全き時代たらしめんと努むる者は、偏へに、未來を冀願はぬ者の、爲さゝゝべき事では無からう。人生、生涯象徵の、噴墓造營は、全くいはれなき事ではなからう。
我等、造營の噴墓をして、全く無意義なる、噴墓に、終らしむる事勿れ。噴墓は、新生への搖籃

なればなり。

脈絡、盡きぬ人生種々相の、中にあつて、恬然として、白日光の下に、息吹くは噴墓である。見よ。

墓誌銘は、莊重典雅に、刻まれたり。

板碑、その面、風霜に壞蝕すれど、先人の業蹟躍動するの感がある。

我等、寶篋印塔の靈蹟に臨みて、南北朝時代の、國史を想到して、時代相を、心頭に畫き、塔婆形狀の、變遷を、考證するも、徒爾では無からう。

南滿、荒原丘陵は、裸形。たゞ見る遠景、郡青の揚柳。こゝは、高麗の名門の奥津城である。一木一草なき、丘陵の頂きに、營まれたる丈高き土饅頭、の育む、高麗王朝の幻影。こゝに興深きは噴墓の地相。民族の優越感に、伴ふ處の、噴墓地相の決定。

大樹、鬱蒼たる、山路やゝ緩に、樹間縫うに、大小、形態種々樣々なる、噴墓を、南海靈場に見る。四顧、山氣肌に迫る彌生盡。殘雪、無礙光に月圓かなる靈山の夕を、我は回顧する。

こゝでは凡てが、正しいのだ。此處では凡てが惡逆でなく、驕慢でなくなつて見える。おゝこの噴墓郡よ。

我等常に、新生を夢見る、幼子なれば、我等の搖籃、我等の噴墓を飾るに、純眞、唯美なるを、要請する。この心は、すでに、既に培はれたる、宗教心の表現でなくてはならぬ。

我等は、宗教の盛衰に伴ふ、噴墓造營の、盛衰の上に、思ひ及ぶ時、我等と、時代を同じくする人々の、宗教信仰の、程度、厚薄の如何に至りては、いま、遽かに斷定する事を得ず、亦斷定爲し能ふとも、そは至難の業であるとはいへ、我等の心の上に、致さるゝ宗教の、力の偉大さを考へねばならぬ。

宗教信仰の生んだ藝術の偉大さ、それは我等の讃頌する迄でも無き事である。世界各國の、古代藝術に、及ぼした宗教信仰の、具象、面影は無限大である。殊に、我國に於ては 佛教藝術の——佛教信仰の力の、偉大さを、否定する事は出來ぬ

であらう。之はたゞに、建築家ばかりにではなしに、言ひ得らるゝ事と信ずる。信仰の力が、藝術を生かす。信仰の美が、象徴の噴墓を、價値づける譯なのである。

我等、無宗教、無信仰にも等しき輩の、尚且つ胸奥に『我等に宗教を與へよ。我等に、信仰の力を得せしめよ。』と叫ぶものあるは、何を語る事か。我等に、宗教無し、信仰無し。されど宗教を求め、信仰に、喘ぐは、否定すべからざる事實である。

こゝに、我等の、罪と、惱みに滿ちた、近代の精神生活があるのではないか。

我等因襲虚僞を、排する。善哉。善哉。

願はくば、象徴噴墓の、上より、傳統を去れ。新生への曙光は、墓場より、さし昇るであらう。

我等、新生への、敬虔なる、使徒の末輩。偏へに、美に、憧るゝ者をして、自由に、歩かしめよ。新生への、門邊には、無數なる、炬火かゝげられたり。我等徒らに、腕を拱いて、冷眼、噴墓に對ふは、罪深き事である。

我等、過去に生き、現在に生れ、未來に甦る。

永劫を、貫く上に、營なまれたる、我等の、マイル、ストーンよ。

希望、勇氣、忍從を、而して、愛と、力と、熱とを、噴墓の上に與へしめよ。

象徴噴墓は、我等の心魂の、暗闇の中にあつて燦爛たる、光輝を放つ。

あらゆる、最上高貴なるものゝ殿堂、象徴の、聖域に、近寄らう。

象徴の、聖域は、淨らかなれば、我等の驕慢、我等の、假相剝ぐべきである。

我等、無心の、幼子なれば、双つの眼より、溢れ出る涙は、阿古屋の具、我等の合掌の、掌に、阿古屋の具は、瓔珞を綴る。

我等の甦生、我等の、誕生の前の、靜謐を、紊してはならない。

我等の幻覺は、拂はれるであらう。

雲霧の、奥を、獨り往くもの。日月の上に我等の、精神氣魄は交感する。

おゝ、獨り往くものゝみの知る、寂しさ、輝やかしさ、歡ばしさよ。

日月は、空に懸り、大氣は、饅幕を繞らす。萬物は、肅然として、聲を潜む。

永劫の上に座す、象徴噴墓の、聖域に於て、聖餐は始められるであらう。（十三年一月二十二日）



斯の明るい氣持ちのよい部屋は、皆さんのご自由にお這入り被下つてよいのです。そして皆さんの慰勞たる氣焰の安全辨にお使ひ被下つたり又はご相談事や、ちツと興太やユーモアの一つも飛ばして頂くも結構です。併しお見掛けの通りに部屋が隘いですから、成るべく多くの方に機會を均等にして頂くため、餘り長いお話はご用捨被下い。勿論ご品格を重んじてのお話しに願ひます。（係）

▲その昔から『武士の風上みにおけぬ輩』と云ふ言葉があるが。それは同じ武士仲間でも、その仲間の體面を汚したり、その持役を背景に背德行爲を働く輩を、斟酌なく一刀兩斷にして苦しふないといふ正しかつた過去のことだつたある▲それからは確に時代が經過し世は進むでゐる。何時のまにか風上みに置けぬ筈の輩が傲然と風上みに居すまいをなほすのを默許するほど世は進むでしまつたのだ。惡でも其例が善よりより多くありさへすれば見一無道作九之一と飛差し詰つて生命に關はるのが此頃の建築界日和である▲機構な世の中になつて了つたのだ▲而も我大阪の建築界が其中でも最秀逸の觀があるとや獨唱、藝者買ひの効用竝に其ら御同役如何で御座る（穗）利用法附鐵筋混凝土構造實用

歌ふべからず、藝者買ひをす撰定は至極妙であり好評噴々るべからずと謂ふところに先疑ひなし。（耶麻）▲その昔建生の位がある▲但し虚言も方便なり俗歌は愉快なり藝者買ひ又時により此限りにあらず、内心穩かなる處先生も生徒も水平線上春日悠々の感が此限りにあらざる筈の藝者買ひは勿論、虚言も甘言も到り盡して俗歌を歌はねば仕事はこれぬし偉くもなれないのだから内心だけの除外例では築協會の雜誌が初めて出た頃『低級なる建築』を紹介されて斯界を益する所多大なりしと聞く、勿論その陰には青筋が出たり引込んだりして居たことだらうと今更の樣に同情する向もある▲所で此頃その低級建築業の偉大なる傑作が遞信省の設計と申す銘打つて大阪は日本橋の眞ん中におつ立つた。猥セツなるペントハウスが大大阪の灰色の空に建築の偉大さを誇つてゐる▲誰かゞ分離派にかぶれたタラニストの作だと云つたがほんとだするど分離派もいゝ迷惑だ▲もつとも世の中は沐猴にして冠する類が多いからな（劍突家）

Mの言草（續）

偏心圓

けふ

……U氏の油畫展覽會を見て、私は久しい間求めて得られなかつた純な緊張さを味はつた。氏とは未だ一面識もないのだけれど、氏が私達と同じやうにカンヴスに向はれるといふことは以前から知つてゐた。

數多い作品には、或は未熟とか拙とかの非難があるだらうし、無論其の言は免れまいと思はれるけれど、私はそれをとやかく言ひたくはない。繪畫の價値が『觀るものを生かす力即ち觀るものが創作の立場に立つことによつて——其作品を續いて創作することによつて、彼れの中に喚び生かされる生命の強さ、崇さ、大いさ、深さ、』にあるとすれば、この氏の純に眞劍な自然に對する態度の表現を如何して輕視することが出來やう。特に氏の繪畫には技巧の達者を認めえないだけ、直接にその純な眞劍さが滾々と溢れてゐるのが感じられる無論、大家の作品は別としても感服し讃歎する立派な繪畫が可成りあることは疑はれないが、私は未だ斯うまで生命に純らな眞劍さを感じた繪畫に接したことがなかつた。中でも小さい作品『春の道』が好きだつた。

斯く

……言ふことが許されるならば、私は現在の多くの人達の生活を『技巧の生活』と言ひ切つてしまいたく思ふ。何を行ふにも、何を言ふにも、その衷心からなる內的必然の聲を聽き入れないで、只その結果による對外關係のみに就て皮相な觀察をめぐらし、技巧を弄して世を渡つてゆく。其人達の唯一の目標は何だらう。人生を干乾びたものに鑄直さうとする危險さへ其人達が甘んじて承認しつゝ向つてゆく旗印しは、私達が何の同情もなく唾

棄し去る『圓滑な生活』そのものではないか。私達が人生の理想として承認すべきものは『圓滑な生活』ではなくて、もつと深い、豊かな人格の開展に支障のない生活即ち『圓滿な生活』にあるのを何時になつたら其人達が氣付くのかしら——。とこんなことを私は思つて見た。

建築家は

……社會的交渉に圓滑な建築物を設計し建築を監督してゐる。美が損傷されても、彼は圓滑を欲するが故に頻死の狀態に陷ちてゆく美を見捨てやうとする。あまつさへ建築は實用物だから左樣う美觀に囚はれておられないと苦しい云ひぬけをする勿論彼等には眞の美そのものが何であるかと云ふことがわかつてゐないから此樣な滑稽を憶面もなく言ふことが出來るのだ。美觀はフルドレッスの華麗ではない。着飾らなくとも美はそれ自身で美であり構造の眞即美であるべきである。美學は到底美其自身を明らかにし得ないのだ。要は質の問題に關はる。建築家の種が改革されない限り建築の美觀はアブノーマルの産物——不健全なものばかりになるだらう。

畫家S氏の

……繪畫の新傾向に就ての講演があつたのは二月の例會だつた。『君、表現流派の新らしい畫を見るには何の豫備知識もいらないんだよ』と鑑賞の立場にある主體の如何を究めず、ただ簡單に其方法を忘れないで話してゐた其の日の聽講者某に會つて閉口したと友人のIが私に話した。

成る程S氏は其講演の時、近代の新傾向の繪畫を鑑賞するには何等の豫備知識なく虛心平氣でそれに向ふのを最も好ましいと話されたには違ひないが、それは表はれてゐる畫即ちザインを見る手段形式である。言ふまでもなく繪畫の本質?は常に自身目的であり全體であるが故にゾルレンでなければならない。感覺はザインに就て滿足し感得はゾルレンに對應する。故に繪畫は感覺するのではなくて感覺を要素として感得するべきものである鑑賞者即ち主體は深い內的生活の體驗者、或はそれを志しつゝ精進する人の人格それ自らでなければ眞に繪畫を觀得ないのが當然である。私はS氏

が以上の條件を、少くとも藝術家には自明のこと丶して講演されたものであると考へる。勿論斯る前提は其の時と場合によつて自明でないことがあるけれども、聽講者の皆が建築家であるとすれば當然其人達は藝術家である筈であり從つて敎養ある。人達と信じられたに因る。しかしIの話したやうな不分明漢があるのをみると折角の講演も誤解、誤傳される處がある。

ゴーホの

……繪には熾烈な魂がある。
ミレーの繪には神に歸る敬虔な魂がある。
セザンヌの繪には凝視する鋭い魂がある。
俺の繪には一體何がある。？怠惰な魂が目醒めた刹那がある。
如何程ゴーホやセザンヌやミレーの繪と俺の繪とがかけ離れてゐやうと、俺はその人達の繪に啓發され導かれることを希ふが故に斯樣な比較を敢てする。併し焦れつたいことには、俺の繪には不相變目醒めはするが、すぐに寢るべく懶惰な魂——此奴が居ることだ。何度となく繰り返へす鞭韃も其時ばかりで果敢ないこと敲きつけたくなる。俺は急ぎはしないが清純に明けてゆく魂の朝の感激の繪が描きたい。——狂喜——沈靜——そして後榮えある魂の夕陽に敬虔を描いて人生を終りたい。

吾々が

……平常最も信頼してゐる或物が、突如見事に粉砕されるか或は他に征服されたとき、吾々は直ちにその粉砕者及び征服者を究めやうとし、尙ほより以上に勝れた？何かを直覺し其を求めるに切なるものである。此處におつて、藝術家は藝術にそれを求め表現せんとし、科學者は其何なるかを究明せんとし、宗敎家は其處に救濟の力を說くのである。震火災後盛に建築されつゝある帝都のバラック建築の大部分は常に此『求めるに切なる魂』の熱に生み出されたものであると思はれる。もとより、斯く生み出されたものであるが故に環境の制約——經濟的制限が其の形成を制限してゐる。建築家は其裡にあつて赤裸の姿——飾りの不用なる良心の要求によつて不自由なる素材の制限を其

憧にして直截な力の表現を企てたのである。故に彼等の計畫になる其バラック建築には、力そのものゝ裸形が其制限を形式として直接に表現されてゐる。それは云ふまでもなく建築の革命である。貴族の權勢的建築でもない。ブルジョアの資本主義建築でもない。デモクラシーの建築であり、プロレタリマートの建築である。カフエーキリンであれ丸善書店であれ、カワウソ襟の外套やダイヤの指環には相應しない。高價な裝飾がなくともニユードの建築は美であり懐しく親しい心に漲つてゐる。建築が其の本來の姿に還つてゆく歡びと言へよう。萬有のよつてなる道德的境地へ還る第一歩は、常に第二第三の歩みを要求してゐる。（つゞく）

春睡や
鏡の中も
かすむ晝

山陰溫泉めぐり

三朝—東郷—吉方

J H 生

眞に雪の積つた遠くの山々や近くの農家や森の姿如何にも淋し相に雪の小路を縫ふ人影の二つ三つ斯樣な景色を窓越しに眺あ乍ら溫い溫泉に浸つた心持を想像し乍ら元日の夕梅田へと急いだ。

汽車は午後九時十分發大社行のつもりで已に切符も買つてある、只同行のAとSの參加が氣遣はれる梅田驛へ着て見るとまだ一時間前、同行に豫定通り顔を合せる。殊に酒好のAがよく屠蘇機嫌で忘れて了はなかつた事と大に笑讃した。

改めて構內を見渡すと其群集混雜は一通りではない、漸くの事で其先登近く迄割込んで改札を待つ『下り大社行』の聲と共に後横斜とあらゆる方向から體の平たくなる程押され乍らやつと改札口を出るや驅足で列車に飛び乘る・それでも漸々三人共座席に取り付けた有樣。

豫定の通り發車、列車は暗の夜を縫ふて河を渡り山を拔け野を走り幾つかの停車場を通過しては一と休みし乍らひたすら大社へと急ぐ。

車內を見ると此處も實に正月。殊には大社を初め數多い山陰遊覽地へ出向く人々の事故其陽氣な事一通りや二通りではない。或者は唄をうたふ向ふの方では流行歌を唱つて居るかと思ふと後ろでは眞赤な顔の男が大聲に演說を初める。一升壜詰をさけて誰彼れの區別なしに呑ませて廻る等殆んど列車中で新年宴會でも始まつた有樣。これも他の時には見られない景色と眠い眼をこすり乍ら脊我慢して眺めて居た。

『上井』『上井』と呼ぶ聲に急いで列車を飛び出すさすがに山陰は寒い、暮れ際に降つた雪が未だ一尺近く殘つて居る。ぶるぶるふるへ乍ら倉吉線の發車を待つ、邊りは未だ薄明。驛前の旅舍も堅く戸を閉じて開かず、只構內の『ストーブ』の光だけ

赤くゆらめくのが默々とそれを見つめて立ち盡して居る、人々の間から認められる。今降りた列車に比して何と云ふ靜けさだろう。それにつけても去年の正月北陸へ遊んだ時を思ひ出す。同じ日の朝早く大聖寺驛で山中行電車を待つ間の寒さ、辛さ、折からの北風に紛の樣な細雪が吹き曝しの『プラット』へ舞ひ込んで來る。電車は此大雪で不定期に成つて何時來るか見當が付かんと云ふ、全く旅の辛さを散々に味はされたのだつた。こんどはそんな事はあるまい。

約二十分待つと改札發車。小驛一つを過ぎて倉吉驛へ着したのが七時。倉吉町から三朝迄約二里自動車にて三十分、乘客と待合處で一服し乍ら待つ『東の大地震の後ですけに何んなもんかと心配しましたけど昨年の暮からの樣子ではいつもより反つて多い位いですに……』と三十恰好の赤ら顏のお神さんが店の間の敷居に腰かけた七八人の客の問に忙し相に答へ乍ら處々へ電話を掛けて居た結局『自動車は澤山あるには有るけれど暮の大雪に少し無理したので使へるのは幾臺もない、誠にお氣の毒だが先程行つた二臺が歸るの待つより外仕方ありません』事になる、待合せる人々はと見ると、何れも京阪神方面と見へて都風の人達で、若い夫婦連れや、小供を連れた中年夫婦、又は小僧も連れぬ氣樂な獨り旅を樂しむと云つた風な中老のお店主人とか、至極呑氣な又は呑氣相なる人達計り。自然話も呑氣に成ると見へて、何時の間にか中老はSをつかまへて斯んな事を話して居る言葉は意外にも東京辨

『私はよくこの邊の溫泉へ參りますが始めて來て驚いたのは湯ではなくて正月の雜煮でした。其時は丁度暮の大晦日の夕方三朝へ着て宿をとり湯につかつて寢ましたが明けて元旦。朝早く湯から上つて晴れた元旦を喜び乍ら女中の運んで來たお雜煮を祝をふと椀の蓋を取つて見ると善ざいぢや有りませんか。何かの間違ひだと思つて女中にこれは善ざいだから雜煮と換へて來て呉れと云ひますとね、女中はこれが雜煮でお正月は必ず之を祝ふものだと云つて何と云つて見ても頑として應じないんですね。餘りお可笑しいので宿の者に尋ねた

ら善ざいと雖煮とが我々のものと全たく反對に成つて居る事が始めて解つた譯でしてね。今考へると其時の驚き方は全くお可笑しい位でしたよ』

『一體どつちが本統なんでせう』中年の紳士が笑ひ乍ら口をはさんだ。自分は次の様な事を云つた

『出雲大社が日本民族在宅の根元だと考へると出雲に近い地方に昔から殘る習慣の方が寧ろ本統かも知れませんね』人々はこんなとりとめもない戯言を笑つて居る内に一臺歸つて來たので吾々三人と外二人同乘三朝を指して解けかゝつた雪水を飛し始めた。

車窓から見渡すと稀らしくも晴れ渡つた青空に一沫の雪も見えず折柄行手の山の端を離れたる朝日が野に山に道に殘りの雪に照り輝いて美しさは亦一入。殊にこの附近特有の赤褐色の光澤の豊富な家根瓦に雪を載せて朝日で輝かした所は一寸めづらしい繪だ、只惡くてらてらした瓦の澤だけは少し厭氣がした。

車は橋を渡つて天神川の東岸を山間へと走る、山又山の其奥の山腹に光る深雪を硝子越につめたく眺める内に又橋を西に渡つてむさくるしい村邑へ入つた。

『こゝが三朝かな』

『まさかこんな處ではあるまい、おや齊木第二別館とある、やつぱり左樣の樣だ』

此んな事を話してる内に車は不意に露路にそれて停つた。覗いて見ると田舍宿らしい玄關に大きく元湯岩旅館と出て居る。この玄關と鉤の手に成つた處に粗末な洋風のペンキ塗家に大きく東洋一ラヂウム温泉三朝療養所と揚げてある。何處かの病院の療養所かな位に一寸呑込んで置いたら後で家族風呂と解つて少々可笑しかつた。

女中の案内で室へ通り、早速湯に入るべく浴衣と袍衣を借りて浴場へ下る。此處の浴場は庭の面から約五六尺抵く半地下室に成つて居る。大さも少々狹いが脫衣用の棚が浴槽の側に並んで居たり、採光が不充分の爲陰氣な感じが有つたりして只氣分本位で行く我々の樣なお客樣には設備の點丈けで考へると餘り受がよくないかも知れない。

偖急いで湯につかる、少し鐵氣色に硫黄臭いなと

思つて頭を出して居ると續いて入つて來た男が湯の水を口に入れてガラ〳〵やつて少し辛いなと獨言いくらラヂウム温泉でも少々穢い、殊にたつた今若い女の人が體をふいて出て行つた計りだのに……とつと其男から顔を外らすと眼の前に黒い變なものが浮いて居る。

よくよく見ると大きな岩の頭で底の分は四尺四方も有らう殊ど狹い浴槽一杯に頑張つて居る。其時は隨分惡い洒落をしたもんだと大に輕蔑して上に登つて見たが後程聞けば當温泉の寶石だ相で樂師樣の夢の告で始めて其岩の下から温泉が發見されたんだとか頗る有難い岩だ相な。

左樣な有難い岩とも知らずAもSも足で蹴つて見たり尻に敷いて見たり押して見たり散々弄んで了つた。何れ近い内に手か足か尻かゞ曲つて來るに違ひない。

其の内に朝飯を思ひ出したら急に腹が鳴り出したので急いで着物を着た。

座敷へ歸る。座敷と云つても先下宿の中位。これでも上の部だと云うんだから御馳走も大方見當がつく。どうも賤しい話だけれど旅に出て酒の不味なのも困る相だが土地の名物と迄行かなくとも其土地の品を適當に料理して食はして呉れないのが一番不平だ、美味いものは料理屋へ注文するとして一品でも如何にも其地方を代表する樣な形とか味とかを持つて居て呉れゝば何よりも嬉しい。大きな玉子撓二片に固い牛肉の板等並べられると何時も癪に障つて仕方ない。

さて見ると此處も御他分に漏れぬ玉子燒だ。何も三朝へ來て御馳走を喰ひ度いとは思はないか山は近し川も近し海も僅々五六里何か有り相なものと攻めたら漸く蟹を持參した。德利も並むだ。

ラヂウムの加減か腹の虫の機嫌か蟹丈けは美味かつた。

一休みの後療養所見學に行つて見る。

宿の下駄をつゝかけて勢よく洋館へ飛込む。濕式療養室使用料御一人一回金貳拾錢とある。番人の案内で病院らしい廊下を傳つて一寸折れた處第五號室へ入る。丁度六疊の長手を七、五と四、五に分けて四、五の方を脫衣場、殘りを浴室とした位

のもの。

それで浴室を説明すると床は廊下から三尺程下つて腰壁と共にタイル敷で其隣との仕切壁に添つた中央に二尺の四尺深さ一尺八寸のマーブルの湯槽がある。

湯は其間仕切の天井下約一尺五寸位の處から壁面に張りつめた硝子面を添つて下り湯槽の約二尺上にある樋に落ち其中央から浴槽に湧出し絶えず床上に溢れ出す樣に成つて居る。

それで最も特異の點は壁を傳ふ湯が極めて微細な水滴となつて室内に充滿して居る事で普通の水蒸氣の土耳古風呂の樣に無暗に呼吸苦しく熱くなく至極柔かく緩漫にあたゝまり得るのが此上なく氣持良く感じられる一回貳拾錢は決して高くない樣だ。

それにしてもものゝ三十分も入つて居れば充分過ぎる位で慾ばつて二回分も浸つて湯當りかすると云ふから注意しなければいけない。乾式療養室と云ふのが二階にあつたが最早入つて見る勇氣も出なかつた。

風なきに花菜ゆれをる

月朧

建築の質の問題

櫻木浩

常識的にも安易に考察し得るやうに、美は所謂物質とは親しき交渉を有ち得るものではない。美は即すべき何物をも有たない。美は美として獨存し、確く自己を藝術の世界に主張する。美は常に物質を借りてその相貌をこの世界に表現するのではあるが、物質に表現されたる美がそのまゝ内なる美の全ての正しき顯示であるかどうか、或はあり得るかどうかは、可成りの疑問を私達の前へ置く。言葉を代えれば、美が如何程まで物質と不離なる交渉を有つものであるが、有ち得るものであるかは、思惟的に言つて確然とはしてゐない。美は物質に量られ數へられたる量でもなく嵩でもない。美は指示し得る外表にはなく、常に知解し得ない内底にひそむ。終始を物質に即した美を想ふ前に、物質を絶えず超克した美を考へる方が、はるかに美には忠實にして、聰明なる思惟の方法であらう。一言で言へば、美は物質にはあらざる本然の内質である。今更ららしくこゝに記かうとするのは、建築の内質とその美との問題に就いてである。

建築は單に調子づきたる巧妙精緻なる所謂智才の表現遊戯ではなく、勿論、愼ましく鈍重壯麗なる心情の内質藝術である筈である。表現の單なる亂積はすぐそのまゝ本然の内質とはなり得ない。正しき意圖なくして、表現に表現を愚かしく重ね加へることが、その内質を充分豐富に滿ち溢れしむることでは、決して、ない。些の内質もなき過多雜混の表現は、多分、似而非藝術の最後に墮ちゆく地獄にしかすぎないであらう。從つて、乏しき表現の内質はまた即座に貧しき内質を意味しはしない。心情なき表現は靈なき肉塊と同視されていゝ。價値をしか有ち得ないであらう、智才は藝

術の師表ではあるかも知れぬが、心情は藝術の母胎である。表現とは内質の生命を虐げ囚へてそれを掩ひかくした不快な外衣の如きものではない。表現のためにのみされたる表現は、表現としては非眞でしかあらぬ。表現を無下に虐使し亂用する者は、多分、反つてその表現に醜く痛められてその總體を殺亡し果てることになるであらう。藝術的雰圍氣が唯單にかゝる意味の表現の世界にのみ構創され得る筈はあらぬ。建築は單なるかゝる意味の表現の甃具ではなく、十全に正しく生きやうとする内質の不死なる生命の制し得ない發意である。單なる外面のコケティッシュや所謂俗惡は、決して、本然の表現ではあらぬ。正しき表現の眞の効用は、外面の表現のみにはない。眞の表現ならざる雜多な裝飾の群は、多分、愼ましく美の世界から遠慮する方がその裝飾自體のためにもいゝであらう。建築の問題は内質の問題である。心情がこそ内質である。

曾てしばしば計畫されたる壯麗雄到なる建築の多くは、恰も經濟のみが建築の一切を左右し干渉し得る唯一の矯れる暴君であるが如うに、しばしば經濟なるものに依つて削滅され虐待されたる屈辱の歷史を有つ。建築をして歪める藝術の世界に追つてはならぬ。藝術を酷使することが經濟である世界には、内質ある藝術は生長し得べくもあらぬ。如何に安價輕便にして如何に巨大尨大なる建築を企圖し建設しやうかとの低い問題が、今日及び明日の建築家の唯一つの理想抱負であるのは、疑ひもなく、危い。かゝる場合の多くは、建築家は唯その建築の本然の姿たる美を、その所謂仕上げと外部との技巧にのみ求め表現せんことに焦心し急いで、美を單なる外面の裝飾とのみ誤算することが或はあり得るであらう。後から急いで附加されたる輕い裝飾は建築の單なる凄い廣告的誇示にのみ効用され、多分はその建築の本然の美を歪め破ることにのみ誤つて役立つであらう。從つて莫大な費用はまたそのまゝ壯大なる建築とはなり得ぬ。嵩や量の大小輕重が建築の絶體價値を決定し得る正しき規準にはならぬ。量はその本然の價値ではない。嵩は内質とも親しく交渉し合はない

內質のみが藝術の價値を決定する。量や嵩は雲の如うに或は水の如うに動き流れても、內質のみは黃金よりも重い。內質のない量或は內質は有たぬ嵩は、多分、量のない內質や嵩のない內質にもひけをとらなければならないであらう。所謂輕い建築とは、決して、その表現的規模の一見低小なる建築の謂ではなく、內質なく浮づきたる淺い建築の謂である。

藝術の眞諦は、言ふまでもなく、內質をそのまゝ優れたる內質として本然の相貌に確立するところにある。藝術は陶醉であり波紋ではあるが、美の單なる夢の如き泡沫ではない。藝術は藝術としての千古に動かすべからざるそれ自體の個の絕對存有であり、又その個の自由なる生長である。こゝに言ふ個とは即ち內質である。故に、この意味での內質はその表現を遁れても確に存有し得るであらう。藝術家もその藝術の內質を些僅も自己の欲求のまゝに動かし左右し得ないであらう。眞に美に住み美に生きる經情眞摯なる藝術家とは、藝術を恣に酷使虐用し得る暴君ではなく、藝術の內質に深く低く厭くまで沈湎しその美に殉ずる愼ましき愛の使徒の謂である。藝術から何物かを獲得しやうし企圖してはならない。藝術に生きるとは藝術から奪掠することでなく、藝術に一切を投げかけることである。藝術は何等かのための手段條件ではない。內質への明確なる感懷を有たずして美への熱慾ある藝術家とはなり得べくもあらぬ。建築の內質は、從つて、その建築それ自體の個である。個は絕對絕命の唯一つの世界にのみ住む。內質の基準は、決して、その個を離れて他に置かるべきではない。建築は何物かの外界への卑しい示唆ではない。表現が內質の誇示であつてはならぬ。內質に比肩し得る優れたる表現はないであらう。建築の內質がその外相の如何に依つて左右し得らるゝ程輕少なるものである筈はあらぬ。內質は永劫の世界のものである。外面的なる柔かい唆感的なる纖細が、すぐそのまゝ深い內質の優れたる永劫の美の表現ではあらぬ　實質的なる雄到偉大なる建築とは、鞏固なるその本然の內質に、些の破綻なく畸形なくして直即しだる最高極頂の眞

善美の總和均衡の藝術の謂である。內質の歸趨は個である。個はそのまゝに內質である。

建築の質の問題は、從つて、その個の問題と同じ意義を有つ。唯單に建築のみならず全らゆる藝術にとつての最も切つ端つまつた重大なる問題はその個の問題である。藝術とは、一言で言つて、個の個としての絶對唯一つの本然なる發現の謂である。觀照のない藝術といふものが存在しやうもないのであるが、個のない觀照なるものもあに筈がない。藝術は個を信ずることからその輝やかしい出發を初める。藝術とは個の內なる權威をそのまゝに正しく生かすことの謂であるからである。藝術の目標は個に出發し個によつて個にまで達成するところにある。忠實なる選ばれたる個は外圍の何物に依つても強ゐられず、自らその置かれたる環境を如實に語るであらう。一つの存在としての個は他の存在の運動の支配を受けず、輕く波動されない。個は常に一樣不變の相をとり、非混合性或は不可入性をその性とする。而も、それが恰も有限的に生長し擴大しつゝ、即ち運動しつゞ運動されつゝあるが如く見える所以は、トルストイが指示したやうに、そはその個を抱含する限界の運動せるが故である。個は強ゐて他を衝撃しない個は廣汎なる融和の世界に他意なく遍在する。なごやかに、その本然なるあるまゝの姿にあらうとするのが個の個としての本然の相である。從つて個には強ゐて外界から附加されたる特異な所謂表現なるものはあらぬ。個は自らの相を自ら充分に賢く表現しつくす。繰り返して言ふやうに、單なる所謂表現のためにのみ企圖されたる粗笨なる表現は、疑ひもなく、藝術のおそるべき陷穽でしかないであらう。上つ面らな昂奮がそのまゝに、所謂藝術活動と呼ばれてはならぬ。藝術活動の眞諦は、個を個から誤りなく擇び、個を個としての本然の位置に、正しく嘗き直すことの謂である。

藝術は、而も、通常時として誤算されるやうに塲なる美の討究ではあらぬ。バウムガルテン以後幾多の優れたる所謂美學者が長い藝術史の表面に煩はしく浮沈したのであるが、美に就いてのやかましき討究も結局は單に美の周圍を空しく模索す

ることのみに止まつて、美の裸なる美の本然の魂に些僅も觸れ得なかつたことは動かすべからざる事實である。美は調和であり、綜合であり、またあるひはそのまゝ眞であり、善であるとはこのんで萬人に依つて今も定義され、曾てされて來たのではあるが、うたがひもなく、美は美の全らゆる定義の彼岸遙かに立つ。美は單なる所謂美學の圈内に住まず、美を解剖し得る美の科學者はあらぬ。故に、曾てシャスラアは彼の著名なる美學書の卷頭に於いて、極めて妥當なる意見を述べた『全らゆる哲學圈内に於いて、美學に於けるが如く、雜多な研究と註釋とを有し、自家撞着にさへ陷入つてゐるものは他に例がない。一方には、雄麗な語法を有し乍ら、内容がなくて、大部分は淺薄なる偏見から成り立つたものを特色としてゐるものもあれば、他方には、否定すべからざる深遠なる研究を豐富なる主題内容とを併有してゐ乍ら反感をもつ程痴劣なる哲學的語法を用ゐて神聖なる體系の殿堂に入らしめる價値があるかの樣な外衣を纏ほせてゐるのがある。最後には、此等の研究と註釋の二方法の間に第三法とも言ふべき折衷的方法を用ゐる、或は時は雄麗な語法を誇示し、又或る時は術學的博識を見せびらかせてゐるのもある。此等三個の缺點の何れにも陷らずに、具體的樣式を採り、重要なる事實を把握し、文を明瞭にして理解し易き言葉で發表しやうとする事にかけては、美學程不完全なるものはない。』美をかゝる意味の美學から自由にしないで、美の本然の姿に融れ、藝術の内質に面接し得ることは到底不可能であらう。美は科學ではない。内質とは所謂物質の謂ではあらぬ。

從つて私の解するところにして誤算がないとすれば、藝術の完成は、決して、外表への廣い發展にはなく、唯内底への深い浸潤にのみ依つて達成せられるゝ藝術の幻は表及にのみ動かない。藝術はものゝ表皮を匍ひまはらない。胸をうつやうな熱い昂奮それのみが藝術の効果ではない。とびあがるやうな明るい驚異、それのみが藝術の視野ではあらぬ。藝術は奇警な發明ではない。誇張した宣傳ではない。趣味に終始した敎養ではない。

幼稚なる表皮への憧憬を、單なる好奇を、過度なる表現を、正しき藝術家は藝術家として怖れるであらう。藝術の徹底とは、安易に言へば、あくまでその内質に固執し終始することの謂である　内質を生かすことにのみ藝術の一切の理想はかゝる藝術の世界には、内質が善ければよい程　その包装は單純であるとの法則がある。内質は不死の世界のものである。優れたる内質は優れたる藝術を即座に立證する。内質の反映のみ藝術を創成する故に、藝術の生長はその内質の内へと生長であつて、外への開展でもなく細叙でもあらぬ。藝術の光輝はその内質の光輝である。從つて、建築の内質も單なるその建築の樣式の差違の謂ではない。内質を建て得ない建築が、藝術としての高い玉座に座ることは能きぬ。假へば〻屋根の單なる變化窓の單なる變化は、勿論、藝術としての内質に些の交渉も有ち得る筈はない。木造であるか鐵筋コンクリイト構造であるかが、建築の藝術性には交渉し得べくもあらぬ。ゴシックであるかロマネスクであるかゞ建築の内質にかゝはりは有たぬ。藝術の生命はその内の質生命である。故に言ふ藝術はその内質ならざる周圍の扞挌をおそれず、その内質の生命をのみ確立するがいゝ。内質の光りを默火せよ。藝術の光輝はそこにのみ永劫の價値を確立するであらう。

櫻餅
亂獄の夜の
あとの茶話

日本建築協會々報

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實サル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ノ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラントスル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス

賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ專業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラントスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別賛助員タラントスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通賛助員タラントスル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會内ニ於ケル其責行ニ付會外ニ於テ責ヲ任ゼザルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ股會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ノ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ニ股會ヲ勸告又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　股會其他ノ事由ニ因リ會員ノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其債務ヲ免ガルヽコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名

四　理事　十名（理事長ヲ理事ヲ含ム）

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選舉ス但會頭、副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク：

一　主　記　一名

二　主　計　一名

三　編　輯　三名

四　編輯補　若干名

五　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長、理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給ト爲スコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會ノ之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ嘱託委員トナスコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ之ヲ選定スルコトヲ得

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ニ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラズ

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル圖書ノ刊行

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル視察

十　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十一　理想的建築ノ計畫

十二　其他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ納出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別賛助員ハ特別賛助費年額金九圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助費年額金六圓ヲ本會ニ前納スベシ

但六期以内ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金賛助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產債權債務及毎月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及毎年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得



會務

一、本協會は今回新入會者の爲に當分の間入會金を免除することになりました次第は前號會誌に報告いたしましたが其の期間は本年二月十八日(例會日)より本年春季大會擧行後壹ケ月間迄と決定致しましたから此の期を逸せずどし〳〵と新入會者の御申込あらんことを希望致します

一、當協會本年春季大會を來る四月十二日(土)中央公會堂で擧行することに決定なりました當日は通俗大講演會を開く豫定で今回春季大會委員を設け役員全部之れに參與して準備中であります委員は左の諸氏に決定なりました

宗兵藏(委員長)　大林賢四郎、山脇友三郎、福永佐和吉、八木幸次郎、平塚鎗吉、小林三造、村上武、松永次松、三浦茂瀧邦一、下村光衛、柳下實、呼子正、吉井長七、今林彦太郎、谷口雁兒、須川雁太郎、阪井米吉(次第不同)

會合

○臨時理事會

△日　時　二月十八日午後四時——六時
△會　場　本協會會議室
△出席者　片岡副會頭、池田理事長、中澤理事、松本理事、本多理事、伊藤理事

△議　事

一、博覽會本館其他の賣却代金收受に關する件

一、能率展覽會出品に關する件
出品可決

一、帝都復興建築資料展覽會に關する件
本件は帝都復興建築資料展覽會長東京府知事宇佐美勝夫氏より出品勸誘方依頼ありしものにして同會會則等を會誌に揭載して周知勸誘することに決す

一、商店及店頭計畫圖案競技募集に關する件
府立東京商工奬勵館長事務取扱百濟文輔氏より應募勸誘方依頼ありしものにして本件も募集規定等を會誌に揭載して應募勸誘することに決す

一、震火災(關東地方)に因る請負工事損害に關する決議書の件
本件は建築業協會より右決議文を送付に付會誌に揭載して爲參考周知することに決す

一、職員退職手當に關する件

一、職員採用に關する件

一、會員銓衡

○例　會

△日　時　二月十八日午後六時——九時
△會　場　中山文化研究所講演室
△出席者　講演者　齋藤　與里
役　員　片岡副會頭　池田理事長
中澤　理事　松本　理事
本多　理事　伊藤　理事
井上　新二　園部　文雄
會　員　野呂長四郎　藤井　厚二
酒井勇三郎　宮本　長治
渋谷　五郎　姫野　武
本野　精吾　清水　榮二
武田　五一　羽原　德衛
山中宗三郎　中川　廣
呼子　正　小西　一郎
石本喜久次　谷　民藏
小川安一郎　池田谷久吉
吉田　健治　高井　芳夫
朝永國次郎　谷田　實
長田岩次郎　楠瀨　徹
友田　薫　武田　經一
工藤榮治郎　前田　清二
八木幸次郎　高田利一郎
服部萬次郎　加藤　善吉
林　正信　鷲尾　九郎
澤原　隆夫　古塚　正治
贊助員　渡邊　義三　小西　武雄
吉岡與平次　新谷庄三郎
森西龍太郎　福井　義長
豊島　停雲

△記　事

一、定刻池田理事長より開會を宣し直に講演者春陽會審査員齋藤與里氏を紹介し左記演題の下に時餘に渉る長講演あり

「畫界に於ける新傾向」

一、右講演を拍手の裡に終り中澤理事一同を代表して謝辭を述べ後十分間の休憩をなす

此間に實物の彫刻繪畫等に付見學をなす

一、夫れより例會を開き池田理事長座長席に着き時間の都合により議事に入る旨を述べ左の件々に付議す

1、本年春季大會に大講演會を開催するの件

右滿場一致可決す

2、春季大會委員設置及委員數の件

大會委員設置の件は異議者なく可決

委員數及委員の選定は理事會に一任することゝなり追て決定次第依囑することに決す

3、臨時入會金免除に關する件

座長より本件に付説明をなし入會金の臨時免除の可否に付諮りたる結果異議者なく可決し次に免除期間に付諮りたるに免除期間は理事會に一任することに決す但し園部文雄氏より本年春季大會大講演會を含みたる期間としたき意見出てこれを是認す

一、右議事を終りて園部敎化委員會幹事より同會の經過報告あり次て中澤主記より會務報告ありて散會す

○敎化委員會

△日　時　二月十八日午後四時——六時
△會　場　中山文化研究所會議室
△出席者　幹事　園部文雄
委員　井上新二、野呂長四郎、藤井厚二、酒井勇三郎、宮本長治、渋谷五郎、姫野武、本野精吾

△議　事

一、古宇田委員長缺席に付園部幹事代理の上議事を進め左記事項決定す

1、野呂委員擔當の第四回講習會講師交涉承諾を求むる件は工學士關場茂樹氏に決定し講師二名共確定す

2、尙會場として大阪市立工業學校の一部借用の件も大阪市長宛願書を提出することに決定

3、第四回講習會規定別紙（略）の通決定

4、園部幹事擔當の府下各團體宛

に本協會より發送すべき文案並團體名は草案の提出ありたるも時間の關係上決定に至らず但し團體數多き爲數回に分ち發送することのみ決定す

5、次回委員會を三月五日午後五時開會のことに決し散會す

○都計委員會

△日　時　二月二十七日午後五時——八時
△會　場　本協會會議室
△出席者　主査　關部文雄、池田谷久吉
委員　石本喜久治、小川安一郎
加藤善吉、小笠原朗、谷民藏
△記　事
一、園部主査より今回横濱委員長辭退申出ありて理事會之れを承認に付後任者の互選されたき旨を述べ委員長互選に移り全員一致を以て左の通決定
委員長　中村琢治郎氏
一、夫れより今後の本委員會事業に付協議し各都市の都市計畫材料蒐集をなすことに決定
一、次に京都都市計畫參考資料圖書に付研究をなし散會せり

○臨時理事會

△日　時　三月三日午後五時——八時三十分
△會　場　本協會會議室
△出席者　池田理事長、中澤理事、中村理事
伊藤理事、田中理事、
△議　事
一、中山文化研究所へ講師派遣に關する件
承諾することに可決
一、能率展覽會出品に關する件
部合を以て出品見合すことに決定
一、入會金免除期間に關する件
入會金の免除期間は左の通決定
自本年二月十八日(例會日)
至本年春季大會擧行後壹ヶ月
一、春季大會委員指名に關する件
1、左の諸氏を選定し指名することに決定
宗兵藏、大林賢四郎、山脇友三郎、福永佐和吉、八木幸次郎、平塚鎗吉、小林三造、村上武、松永次松、三浦茂、瀧邦一、下浦光南、柳下實、呼子正、吉井長七、今林彦太郎谷口廉兒、須川徹太郎、阪井米吉
2、本委員會は特別のものなるに付役員全部(十一名)は之れに干與することに決す
3、第一回本委員會を左の通開催に決定
時——三月十日(月)午後五時
所——中央公會堂小集會室
一、第四回講習會講師打合會に關する件左の通開催のことに決定
時——三月十二日(水)午後五時
所——本協會會議室
一、人事に關する件
1、職員退職給與金の件　決定
2、給仕退職並給與金の件決定
3、職員採用並給料の件　決定
4、其他補助員退職及給仕採用の件　未決
一、會計事務に關する件　可決
一、會員銓衡

○教化委員會

△日　時　三月五日午後五時——九時
△會　場　本協會會議室
△出席者　幹事　園部文雄、
委員　小笠原朗、酒井勇三郎、
姫野武、澁谷五郎
△議　事
一、高等學女校家政科に建築の課目教授に關し教授細目を別紙(略)の通作成決定せり
一、講師謝禮並豫算請求の件に付協議
一、職工教化に關し請負業に從事しつゝある會員若干名を委員に囑托することを請求すること、人選は小笠原委員擔當のことに決定
一、講演機關存在の通知を發する

箇所を決定す但し實行は次回に決定することとなる

○春季大會委員會

△日　時　三月十一日午後五時——八時三十分
△會　場　中央公會堂小集會室
△出席者　委員　今林彦太郎、呼子正、瀧邦一、柳下實、八木幸次郎、松永次松、小林三造、阪井米吉、下浦光衛、平塚鎗吉、須川雁太郎、
役員　池田理事長、中村理事、本多理事、伊藤理事、田中理事
△記　事　一、池田理事長より本年春季大會擧行に付一場の挨拶と希望を述べ了つて先づ委員長の互選ありたき旨を述ぶ
一、委員長の互選を行ひたる結果理事長に指名を一任して左の通決定
委員長　宗　兵藏氏
一、次に委員長代理を互選したもる決せず本夕だけ池田理事長委員長代理として座長席に着き議事に入り
左記事項を協議決定す
1、晩餐會を終り講演會を開くこと
2、日時、四月二十一日（月）
自午後五時至六時——晩餐會
自同　六時——講演會
3、場　所
中央公會堂大集會室——講演會場
大阪ホテル——晩餐會場
4、講演會名——通俗建築大講演會
5、晩餐會費用に關する件
一、各係員を左の通決定
會場係　今林彦太郎、山脇友三郎、谷口雁兒、瀧邦一
講演係　鷲取陽　阪井米吉、下浦光衛、平塚鎗吉、村上武、江村郊邨、
宴會係　八木幸次郎、福永和佐吉、小林三造、須川雁太郎
庶務係　柳下實、松永次松、吉井長七、三浦茂、西谷節
會計係　大林賢四郎、呼子正、大和榮衛
一、次回委員會を左の日時開會のことに決定
時——三月十九日（水）午後五時
所——本協會會議室

○理事會

△日　時　三月十一日午後八時三十分——九時
△會　場　中央公會堂小集會室
△出席者　池田理事長、中村理事、本多理事、伊藤理事、田中理事
△議　事　一、三月例會に關する件
1、三月例會は講演に代ふるに討論會を開くことに可決し論題を左の通決定す
建築設計事務の能率增進に就いて
2、例會議事左の通決定
1、春季大會に關する豫算の件
2、都市改造博覽會開催に關する件
一、今宮職工學校へ改良住宅設計圖案及住宅模型等貸與の件
同校より創立十週年紀念展覽會開催に付貸與方申越により貸與することに可決
一、委員辭退に承認の件
久保田緊亮氏より病氣の爲春季大會委員辭退申出に付承認することに決定但し補充せず
一、春季大會費支出に關する件
可決
一、會員銓衡

○第四回講習會
講師打合會

△日　時　三月十二日午後五時——七時三十分
△會　場　本協會會議室
△出席者　講師　八木幸次郎
　役員　中澤理事　園部敎化委員
△記　事　一、講師關場茂樹氏上京不在の爲書面を以て時間割其他の意見を提出されしに付之れにより時間割を協定せり
　一、其外會場受付の手配等講習會に關する一切の打合をなし散會せり

○例　會

△日　時　三月十七日午後六時——十時
△會　場　中山文化研究所講演室
△出席者　役員　片岡副會頭、中村理事、松本理事、伊藤理事、本多理事、
　會員　酒井勇三郎、小松靜、友田薫、川村種次郎、古橋剛丸、藤村武、澤原隆夫、國枝博、高田利一郎、和田貞次郎、澁谷五郎、野呂長四郎、古宇田實、加藤善吉、須川雁太郎、阪井米吉、武田經一、八木幸次郎、小笠原鉦、朝永國次郎、園部文雄、下浦光南
△記　事　一、定刻中村理事より開會を宣し諸種の報告より例會開始され先づ古宇田敎化委員長より敎化委員會經過報告あり次で中村理事より春季大會委員會經過報告及會務報告ありたり
　一、右了りて本夕池田理事長欠席に付代理として中村理事座長となり議事に入り左の件に付協議をなす
　1、春季大會豫算に關する件
　本件は原案の通承認
　2、都市改造博覽會開催に關する件
　本件は諸説百出して纏らず結果尚研究の上附議することゝなる
　一、次に建築設計事務の能率增進に就いてなる論題により討論會に入り片岡安氏、中村琢治郎氏、松本禹象氏、下浦光衛氏の本題に對する意見を述べられ盛會裡に散會せり

○敎化委員會

△日　時　三月十七日午後四時半——六時
△會　場　本協會會議室
△出席者　委員長　古宇田實
　幹事　園部文雄
　委員　野呂長四郎、酒井勇三郎、澁谷五郎
△議　事　一、職工敎化に關し打合をなす
　一、分科委員會を設け本日出席者全部これに當ることに決す
　一、次回の分科會を來る二十四日午後より開くことに決す

○臨時理事會

△日　時　三月十七日午後四時半——六時
△會　場　本協會會議室
△出席者　片岡副會頭、中村理事、伊藤理事、本多理事
△議　事　一、春季大會豫算に關する件
　春季大會豫算別紙（略）の通承認のことに可決す
　一、國民生活改造展覽會に關する件
　本件は改良住宅設計懸賞當選圖案を少數出品することに決す
　但し出品費用の多額を要せざる範圍に於て出品すること
　一、第四回講習會聽講料に關する件

第四回講習會聽講料は會員賛助員は金參圓外來員は金五圓なるを今回限り均一となすことを教化委員會より要求ありしを以て凝議の結果可決す

一、會員銓衡

○新入會員

（會員）北川　正彌君　藤枝　貫一君
高橋　謙吉君　小川　久市君
高木眞太郎君　中西　六郎君
矢崎　高儀君　森田　富君
水上　昌三君
（地方會員）小津　利一君　井上　賢二君
渡邊　家三君　池田　惠君
高木　與吉君
（終身賛助員）川村喬藏君
（普通賛助員）古林　秀雄君　今村　博成君
廣田　好文君　宇田　徹君
今村　亮君　小泉爲次郎君
遠藤　康彦君　中村　敬輔君
奥村伊次郎君　岩崎　秀雄君

○退會者

（會員）荒木　貞幹君　八尾德太郎君
（普通賛助員）吉岡　作一君　小山　照雄君
石井　鶴松君

○住所、勤務先移轉

小川久太郎君　西成郡粉濱村三六五
櫨藤　要吉君　東京市外千駄ヶ一七三
遠山　勇吉君　名古屋市中區新柳町住友銀行名古屋支店建築場大林組
桑名町出張所
野口　源一君　和歌山市一番丁一官舍
佐伯　德吉君　東京府下小松川町字西小松川四四一〇
海津　勝人君　京都市上京區下鴨下川原町
谷本多喜治君　上海郵政局信箱五五八
田中　浩君　東京府下中野町上町一七五四番地
片岡　勇夫君　大阪市西區八幡屋町二六〇
中村儀右衛門君　大阪市南區大和町四三番地
三谷　萬三君　西成郡千船町大字蒲島四十三番地ノ六十二番戸
西野　清直君　大連市神明町長谷川組内
安藤伊右衛門君　大阪市西區市岡町六八六ノ二佐伯工務所内
平木　鉄治君　福山市西堀端町鈴木建築事務所内
呼子　正君　東成郡天王寺村大字天王寺六一四五番地
請地享之介君　神奈川縣内務部土木課建築係
酒井　捷治君　大阪市南區天王寺眞法院町五四一三
久樹　廉一君　大阪市西區八幡屋町四ノ美馬勝一方
根岸　元治君　東京市日本橋區本町三丁目

佐藤　彰美君　竹中工務店東京支店
荒川　貫直君　豊能郡箕面村字櫻ヶ丘文化住宅
加田　安彦君　尼ヶ崎市別所村割ノ内八九三永田方
山口　茂樹君　京都府天田郡福知山町字堀一四八一ノ二
林　德一君　大阪市西區八幡屋町一一七
大阪市南區大寶寺町仲ノ町六〇番地大寶小學校建築場
七尾憲太郎君　清水組作業所内
小池　光義君　和歌山市久右衛門町五
五五〇七　大阪市南區天王寺細工谷町
阪本　佳明君　東成郡中本町中道一〇四
坂本　義信君　安東縣日本領事館新築工事現場内
中根　龜一君　埼玉縣川口町大林組川口町出張所内
森　與助君　東京市陸軍省經理局内
村上　秀二君　大阪市東區北濱五丁目宗建築事務所内
藤元　助一君　神戸市兵庫水木通五丁目三五藤元安一方
小泉　吉明君　大阪市西區田中町二九八番地西谷幹夫方
間　猪三郎君　三島郡吹田町偕樂園一號地ノ三
岩佐彌太郎君　滋賀縣大津市下百石町

出浦　高介君　東京府豐多摩郡野方村新井四九七

瀨戸强三郎君　東京市日本橋區本町三丁目竹中工務店東京支店

宮林　勝君　廣島市千田町帝國人造絹糸株式會社内

野村　理一君　大阪市東區北濱二丁目大阪住宅經營株式會社内

○改　名

普通賛助員中村宗三君は中村儀右衛門と改名

○職員異動

鷹取陽氏三月五日付を以て本協會書記就職

寄贈圖書

土木建築　三號函　日本實業興信所

新報建築畫報　三號　同社

住宅　三號　住宅改良會

庭園　二號　同協會

趣味之園藝　三號　關西園藝會

建築雜誌　二月號　建築學會

活人　三號　活人社

建築新潮　三號　洪洋社

建築の普及　三號　帝國工業教育會

大阪土木建築業組合報　五十號　同組合

住宅研究　二號　文化建築社

朝鮮と建築　二號　朝鮮建築會

滿洲建築協會雜誌　二號　同協會

工業評論　一號　同社

工業ノ大日本　三號　工業ノ日本社

電氣評論　三號　同社

電氣學會雜誌　一號　同學會

工政　三號　工政會

郊外の大阪　三號　郊外の大阪社

大阪工業倶樂部　三號　同倶樂部

都市公論　二號　都市研究會

國民經濟雜誌　第三十五卷第六號　寶文館

通俗衛生　二號　大阪府衛生會

人と人　三號　協調會

都人　第三光都人社

會報　第十四號　名古屋工業會

樂ある生活　四號　文化創設會

工業之友　二月號　工手學校同窓會

新生命　八十二號　大阪結核豫防協會

學士會月報　四三一號　學士會

知多商工月報　二月號　知多商業會議所

役員及職員

副會頭	片岡安	編輯係	
理事長	理事 池田寶		江村郊邨
主記	理事 設樂貞雄		鷲取陽
同	理事 中澤誠一郎	庶務係	
主計	理事 中村琢治郎		西谷節
同	理事 松本禹象		鷲取陽
編輯	理事 本田登		
同	理事 佐藤彰美	會計係	
同	理事 本多二郎		田村春松
同	理事 伊藤正文		大和榮衛
同	理事 田中綱		

會員	三〇三
名譽贊助員	八六
特別贊助員	二九
合計（三月二十日現在）	一〇五四
會員（地方）	一一四
終身贊助員	五六
普通贊助員	四六六

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓

特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ

大正十三年三月廿八日印刷
大正十三年四月一日發行（毎月壹回一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一

發行兼編輯人 江村恒一

兼印刷人 大阪市東區內淡路町一丁目廿一番地

印刷所 大阪活版所

大阪市北區堂島濱通一丁目一番地

發行所 日本建築協會
堂島ビルヂング
電話北四一九一番
振替口座大阪三九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北

特約販賣店 柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

第七集第四号　掲載広告一覧（掲載順）

岩住金庫鉄工所
日本エレベーター製造
大野正営業所
阿部鉄工所
ミドリ商会
飾磨化学工業
大塚鉄工所
野沢幸三郎商店
瀧山商店
奥村重兵衛商店
高田松太郎商店
西孫南店
小山
福田製作所
酒井硝子店
小谷商店
特許エレベーター製作所

ムツ商店
田中昌司商店
二和商会
南満鉱業
文化工業
ポール　イー・サンマン事務所
東洋コルク工業
石綿スレート
吉岡商店
高谷商店
山本東作商店
田村商会
建築金物商会
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
今井硝子店
横河橋梁製作所

大平工業所
HANKEN SEISAKUSYO
井筒政蔵商店
日本ホロタイル
森川組
佐伯捨次郎製作所
大福海上火災保険
桜工業
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
片岡松井建築事務所

横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
中村建築研究所
真水工務所
真水三橋建築事務所
国枝工務所
柳下建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
西原衛生工業所
大阪窯業
池田勘蔵
日本土木大阪出張所

大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯工務所
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
小西組
藤木正一
鴻池組営業所
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
有山組
辰巳吉之助
清水組大阪支店

森本建築社
銭高組
清水福太郎
正木工務店
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
大理石工業
栄進社
松尾和助本店
山本窯業商店
萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
東京建鉄
河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
日本木材工芸
高島屋呉服店

コルク工業
ベニス工房
木下商店
城口汚水処理研究所大阪支店
米本栄商店
大阪青写真調製所
浜口商店
大阪耐火リノリウム工業
岩崎商業
小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
日本工剤
高田商会
政正
関西ステインド硝子製作所
旭硝子
淡陶
川崎工場
サカイブン建築鉄工所

亀井商店
内外土木建築材料
工藤電気工務所
小野田屋根瓦製造所
米山製作所
境川文庫
岡部商会
日米板硝子
田中源太郎商店
極東板硝子工業